



大東亞戦争の意義

米一極支配脱却

新世界秩序への転換

#870

日本よ今...

闘論！倒論！討論！

日本よ、今、闘論！倒論！討論！2024第870回

大東亞戦争の意義

～米一極支配脱却、新世界秩序への転換

R6/8/12

パネリスト：

宇山卓栄（著作家）※スカイプ出演

大高未貴（ジャーナリスト）

折本龍則（千葉県議会議員）

ジェイソン・モーガン（歴史学者・麗澤大学国際学部准教授）

施光恒（九州大学大学院教授）

用田和仁（元陸上自衛隊西部方面総監 陸将）※スカイプ出演

司会：水島総

水島「皆さん、今晚は。日本よ、今、鬪論！倒論！討論！2024第870回目の討論となります。今日は間も無く迎える8月15日、大東亜戦争の意義。毎年、大東亜戦争についての討論をやっておりますけれども、今年は色んな形で…まあ、今日のニュースによれば、あと数日以内にイランからのイスラエルに対する反撃が始まるという準備が進められているというニュースが入ってきました。

昨日、パリ・オリンピックが終わったということで、パラリンピックは未だあるんですけども、こういうような非常に、ざわついたと言うか、イギリスでは、極右というグループが暴れ放題していると。でも我々のチャンネルでは、その背後にあるのが、実はヘッジファンドのあの例の方ですね。こういう人だとか、実は、そういう形で様々に表面上に現れる行動の中、色んな後ろで操っている人間や、そういうものが色々進められている。或いは、ロシア領にウクライナ軍が攻め込んでいるとか、そういうような形の報道もされております。終わりの始まりの一つの証拠でしょうけども、こういう中で8月15日を迎えます。79年目、チャンネル桜にとっては21年目を迎えるところになります。

今日はアメリカの一極支配からの脱却、新しい世界秩序への転換なのか、或いは、そうやっていくのか、アメリカの大統領選挙も含めて、これからの世界を、みんなで考えてみたいと思います。

もう一つ、ニュースがあったのは、チャンネル桜の番組では非常にキツク批判して来ました。アメリカのエマニュエル駐日大使が11月下旬に離任すると。どうもハリス政権が出来たら中に入ろうかなんていう希望を持っているそうで（笑）だという噂ですけどもね、そういう意味で、散々やりたい放題やってエマニュエル総督、日本総督と言われた方ですけど、とにかく11月に離任するというようなことが産経や共同通信で発表されております。

そういう中で、この間、広島ではなくて長崎で、イスラエルを招待していないから、我々は参加しないということで、エマニュエル大使、アメリカを始め英、仏、独、カナダですね、G7の5か国の駐日大使が拒否したということですけども、みんな、これでビックリしたというか、ふざけんじゃないと。原爆を落としたのは誰だという当事者が、俺は俺の気に入った奴を招待しないのなら、俺は出席しないからねって、こういったことで正に植民地化した日本の状態が、あからさまになったということですけど、これに対して、私達は非常に日本人としても、こういう問題を含めて、原爆投下っていう問題、大東亜戦争の終わりに2発のプルトニウム型、ウラン型の原爆が投下された訳ですけども、やはり、この問題についても考えなきゃいけないと思います。

というのは今、ガザで行っているジェノサイドというか4万人が殺され6万人が怪我をして病院送りされていると。約10万人の死傷者を出している、これを正にジェノサイドと言ってもいいんですけども、このやり方って、一体、イスラエルは何を目指しているんだろうということ、私は、二つ、挙げたんですけども、むしろ敗戦の日本、武装の無力化と同時に何でも言う事を聞く国民を作り上げる。

正にGHQが目指したやり方、つまり原爆で、どのぐらい死んだって構わない、言うことを聞かなければどんどん殺しちゃう。勝ったら言うことを聞くような状態で軍隊を持たせない。無力化する。こういった戦後のGHQのやったことをイスラエルは忠実に今、ガザ地区で、まあ、原爆は未だ落としていませんけど、大量虐殺を行いながら目指しているんじゃないか。

こういうような感じもしていて、非常に不愉快どころか、我々は、やっぱり同じ胸の痛みを感じてしまうというようなことでございます。そういう意味で、今日は、この大東亜戦争の在り方、まあ、拙いことがあったら拙いことを言って戴きたいと思います。これを皆さんと共に話し合ってみたいと思います。それでは出席の皆さんをご紹介します。まずジャーナリストの大高未貴さんです。宜しくお願いします」

大高「宜しくお願いします」

水島「九州大学大学院教授の施光恒さんです。宜しくお願いします」

施「どうも。宜しくお願い致します」

水島「歴史学者で麗澤大学国際学部准教授のジェイソン・モーガンさんです。宜しくお願いします」

モーガン「お願いします」

水島「千葉県議会議員の折本龍則さんです。宜しくお願いします」

折本「宜しくお願いします」

水島「今日はスカイプのご出演でございます。元陸上自衛隊西部方面総監、陸将の用田和仁さんです。宜しくお願いします」

用田「お願いします」

水島「そして作家の宇山卓栄さんです。宜しくお願いします」

宇山「宜しくお願い致します」

水島「はい。今日はこのメンバーでお送り致します。先程、一応、バ~つと言いましたけれども、こういう形で極めて流動的な世界になって来ています。皆さんが、どういう見方をしているか、この大東亜戦争の意義とか、こういうものを含めて、まず、一言ずつ戴いてから、本格的な議論に入ってみたいと思います。じゃあ、大高さんから、まず、大東亜戦争について一言」

大高「はい。まず、若い人のみならず、我々中高年の世代でも、何故、大東亜戦争が太平洋戦争と言い換えられたのか、その根本的な理由、知らない人が居て…」

水島「そうですね」

大高「ちょっと啞然とするんですけども、そこは、もう徹底しないと語るにあたり、先人達に非常に失礼な話なので、何とかしないといけないだろうという風に思っております。はい」

水島「そうですね。大東亜戦争は、私は、もう20年、21~2年前、ここでも放映しましたが、特攻のドキュメンタリーをフジテレビで奇跡的に放送することが出来まして、『特攻、国破れても国は滅びず』っていうタイトルですが、これは、特攻隊の教官が言った言葉で、国は戦いに負けても滅びることはないんだと、我々がしっかりしていればね。でも、それもおぼつかなくなっているって噂もあるんですけど、その中で多分、初めてフジテレビで大東亜戦争っていう言葉を使ったんですね」

大高「うん」

水島「あとは何処へ行っても太平洋戦争って言わないと通らないというね」

大高「うん。変ですよ」

水島「元特攻隊の隊員の皆さんがそう言ってくれたんで、余計、助かったんですけど、そういう状態が今も続いています。はい、有難うございます。じゃあ、施さん、お願いします」

施「あ、そうですね、はい。私は、今日、『歴史の語り方』というような話を少しさせて戴きたいなと思ったんですね。やはり歴史を語る時、この大東亜戦争もそうですし、その中でも、例えば、特攻隊の方々について語る時もそうですけれども、やはり、何て言いますか、自分とか自分の暮らしっていうものが、その上にあるものだという、その強い影響の下にあるのだっていうことを認識して語らないと、もう言葉が空虚になってしまいますし、大体、そうではないと、まあ、我々の生活の根底自体が、実際に揺らいでいくんじゃないかという風に思うんですね。

日本の伝統的な思想の中で私は非常に大切な理念だと思うのは、やっぱり『恩』という理念だと思うんですね」

水島「うんうん」

施「まあ、つまり我々自身とか我々の暮らしっていうのが、過去の先人の影響の下にある、先人の恩恵を被っているなあと、色んな形で、まあ、それっていうのは、実は、日本人が、非常に大切に代々語り継いで来た理念だと思うんですけども、それが非常に大きな日本の歴史的契機の中で考えた時に、やはり、大東亜戦争っていうもので、特にそれが端的に表れるのが、まあ、若い人が色々懊悩の末だと思いますけれども、自分の命というものを捧げたと。国の為に国の未来を信じてということだと思いますけれども、そのところを、もっと意識して、我々は生きていかなければいけないんだと思うんですね。

例えば、そういうようなところで大東亜戦争を語る時というところで、やはり、自分自身と非常に繋がったものだと。自分達の暮らし、自分達の存在自体が、その上にあるのだっていう形で、勿論、全面肯定しろとは、私は全然、思わないですけども、ただ否定するにしても、部分的に否定して吟味していくとしても、それは、やはり当時の人々、当時の決断に対して共感し、批判する時も、その共感に基づいて批判していくべき、我々は、他のやり方があり得たのだろうか。

何故、この道を選んでしまったのだろうか、何か、そういう語り方というのを、やはり、我々は真剣にやっていくべきではないかと。そうしないと、やはり、我々の存在の根底自体が、おかしくなってしまうのではないかという風に思うんですね。

実際、この今のグローバリズム、グローバリズムって言われる中で、本当に日本の中の教育者とか指導者に当たるような人達が、日本の国が国という形で、あと数十年、数百年、続いているという、そのリアリティが、将来に対するリアリティみたいなもの自体を結構、失っている感じがするんですね。

ですからグローバリズムの時代だから、国と違って、もう古いんだみたいなことを言う人が非常に多いですね。そういうことを次の世代の人達に語っていってしまうと、本当に、

あのう、何て言いますかね、正に過去の人々に対して申し訳も立たないですし、それに、実際、我々も我々の子孫も非常に窮地に陥るんじゃないかという風に思うんですね。まあ、そういうところで、私は今日、『歴史の語り方』というのを考えていきたいなという風に思っております」

水島「そうですね。はい、有難うございます。モーガンさん、お願いします」

モーガン「はい。有難うございます。歴史の語り方も非常に重要だと思いますし、大東亜戦争は勿論、歴史の一部だと強く意識しております。それと同時に、その戦いは未だ終わっていないですし、『恩』、正に『恩』という気持ちを大切にしながら80年前、90年前に戦っていた方々の大義を大切にしながら、今、目の前の敵をぶっ壊したいと考えています。

その戦いは本当に、正にもっともっと益々深刻になっている気がしますし、その歴史の中で、もうインスピレーションを探って、それを大切にしながら戦いたいと考えております。人種差別は、取りわけ英霊達が戦った連中が人種差別に長けていた連中で、戦争が終わっても、だからと言って人種差別、植民地主義が終わったとは決して言えないし、ただただ形を変えて、また同じようなことをやっていますし、今のガザの事もそうですが、とにかくアングロサクソンとかワシントンが世界を苦しめることが、もう一切、変わらないし、逆に今になっても、もっともっと酷くなっているという意味では、今、世界に求められているのは大東亜戦争の大義ではないかと、その時の日本帝国の大義ではないかと考えています」

水島「うん。はい、有難うございます。あとで、また出るかも分かりませんが、所謂、反グローバリズムとかね」

モーガン「はい」

水島「こういうものの戦いというのは、実は大東亜戦争を行った、ある種の白人世界支配秩序に対する、ある種のプロテストっていうかね」

モーガン「そうですよ」

水島「そういうものがあつたので、今、それと共通するものがあるかどうか」

モーガン「はい」

水島「これも、また考えてみたらと思います」

モーガン「はい。はい、有難うございます」

水島「はい。折本さん、じゃあ、お願いします」

折本「はい。大東亜戦争は基本的には自存自衛の戦いであって国体護持の為の戦いであったという風に思います。ただ同時に、やはりアジア民族、有色民族の解放、独立、そして共存共栄の為の大義を掲げて戦った戦争だという風に思っております。

戦いに敗れはしましたがけれども、しかし、結果的に多くの有色人種、アジアの国々が独立し、まあ、アフリカもそうですけれども、独立を果たしたという意味に於いては、この大東亜戦争の大義、目的というのは実現したのではないかなあという風には思っています。そ

れも我が国の先人達の尊い犠牲の上に、今日の日本があるんだということは正当に評価しなければいけないという風に思っております。

もう一つ、私は大東亜戦争が今も続いているという風に思っております、先程、モーガン先生も社長もおっしゃったように、例えば、先日、8月9日の長崎の平和記念式典に、エマニュエル大使が欠席をするというの、やはり、ああいう露骨に、あからさまにイスラエル支持の政治運動をして政府に対して圧力をかけてくるという、これも結局、そういう欧米的な価値観を我が国に強制していると。

LGBT理解増進法の時もそうでしたけど、我が国の国体や伝統的な価値観とは相容れない欧米的な価値観を正に植民地総督の様な態度で、我が国に押し付けようとして来ていると。やはり、これに対して我々日本人は戦わなければいけないし、正に近代以降、数百年に渡って白人が世界を支配していた。そしてアジア有色人種を支配し、弾圧し、搾取してきた。

そういう世界秩序を覆したのが、あの大東亜戦争であって、今一度、その大義に立ち返って、今こそ我々が先人達の思いを継承して、そういう内政干渉の外圧を排除しなければいけないと思いますし、国体を護持しなければいけない。そして同時にイスラエルが正にパレスチナに対してホロコーストに匹敵するような大量殺戮を行っている。

我々も先の大東亜戦争では広島・長崎に原子爆弾を、アメリカによって落とされた。これは、はっきり言って、アメリカの白人による人種的な偏見に基づく行為だと。アメリカは、あの戦争の終結を早める為に落とされたという風に言っていますけども、それは全くの嘘でありまして、やはり日本に戦争遂行能力が無いのは判っていた上で、敢えて、ああいう大量殺戮を働いたっていうのは、正に、我々有色人種に対する偏見があって、一つの人体実験として、原爆投下をしたという点に於いては、結局、そのエマニュエル大使がパレスチナに対して、持っている考え方、或いは、我々に対して平然と言う、LGBT法を押し付けて来る、この考え方っていうのが根底にある価値観というのは思想というのは一緒だと思うんですね。

ですから、今こそ国体護持、アジアの独立、解放、共存共栄、道義的な秩序という、正に、この大東亜戦争の大義に、もう一度、立ち返って、我々に今日を生きる我々が戦わなければいけないんだという風に考えております」

水島「そうですね。丁度、今、指摘戴きました、アメリカが平和の為に、早く平和を齎す為に原爆を落とされたっていうのは当時、ずう〜っと、そうですね、昭和いっぱいぐらい迄、まあ、平成に入ってもですけども、つまり発表では、本土決戦をやって、アメリカ軍が上陸したら100万人のアメリカ兵の死傷者が出るというようなことだったから、やったんだと言いましたけど、先程、指摘あったように、国防総省としては戦っても実際米軍は5万人ぐらいの損傷だろうと解っていたって。

ただ、100万人、出るっていうのは大袈裟に言ったっていうかね。だから落とされたんだという理屈をつけたっていうのは、もう大分前から解って来ている。だから、やっているやり方が異教徒とか自分と違う考えの価値観で、自分達の生存の為だったら、向こうを全滅させても構わないという、残念ながら旧約聖書の選民思想みたいな形の中で行われていることがあるっていうことも、我々はいい悪いじゃなくて勇気をもって、その事実を頭の中に入れて、判断しなきゃいけないっていうね、今、折本さんが言った様に、我々はそう

いう事実を事実として引き受ける勇気を持たなきゃいけないと思います。はい、有難うございます。

ではスカイプのお二人ですけど、用田さんは長くなるかも分からないから、宇山さんの方からお願いします」

宇山「はい。宜しくお願いします。私も折本さんと同じく長崎原爆の日に行われた平和記念式典にイスラエルを招待しなかった問題、そして、そのことから米国の駐日大使、エマニュエル大使、欧米大使が欠席を表明した問題について、少し触れさせて戴きたいと思うんですねえ」

水島「はい」

宇山「そもそも欠席をした欧米大使達、一体、彼らはイスラエルの何なのでしょうか」

水島「うん」

宇山「表向き、彼らの欠席の理由と致しましては、こういうことを言っているんですね。イスラエルをロシアやベラルーシと同一に扱うのは残念だと、誤解を招くということで反発をしているんですけども、私は、本当の理由はそういうことではないだろうというように思っております。この欧米では、ご案内の通りイスラエルを認めないということは、あの戦時中の、まあ、YouTubeで言うと色々と問題があるので、具体的には名前を伏せませすけれども、ある民族の虐殺を認めないことに決めつけられるんですね。

つまり、これは一種のポリコレ状態で、人権問題と結びつけられて、イスラエル国家を支援することが必然というように欧米ではされているというように思うんですよ。異議を唱えることが許されないという、こういう圧力だと思うんですね」

水島「うん」

宇山「米英は、この原爆について戦争を終結させることが出来た。未だに原爆という日本のホロコーストの所業を軽視しておいてね…」

水島「あ、すみません。宇山さん、宇山さん」

宇山「一方で…」

水島「聞こえてないかな」

宇山「はい」

水島「すみません、今、戦争を終結、出来たってところで音声途切れちゃったんですよ。ごめんなさい」

宇山「あ、途切れましたか」

水島「そこから、もう一回、お話し戴けますか」

宇山「はい。この米英は原爆について戦争を終結させることが出来たと言って、未だに嘯きながら原爆という日本人ホロコーストの所業を軽視しているという状況だと思うんですね」

水島「はい」

宇山「一方で同じ戦時中に起こったとされる、ある民族の虐殺については、頭（こうべ）を地に擦り付けて平伏をしている訳です。この差は一体、何なんだと。この倒錯は一体、何だというように、私は思います」

水島「うん」

宇山「原爆で亡くなられた方々を追悼するという真摯な気持ちが欧米に本当にあるならば、イスラエルを招待しなかったということとは関係なく式典に進んで来るはずですね」

水島「うん」

宇山「所詮、私は彼らの偽善、欺瞞ということだと思うんです。もう二度と来るなと言いたいですよ」

水島「そうですね」

宇山「特にエマニュエルです。エマニュエルは、この秋には離任するということのように思いますが、このエマニュエルという人物はアメリカ・イスラエル公共問題委員会という有名なロビイスト団体がごぞいますね。AIPACと呼ばれる組織ですけども、この組織によって育てられた人物です。この組織はアメリカで最も強大なロビイスト団体で強力にイスラエルを支援しております。

そういう政治的背景を持つ人物でありまして、更に、このエマニュエルの父はイスラエルのエルサレム出身の民族の武装組織、イルグンという組織があるんですけども、その組織のメンバーであったこともよく知られております」

水島「うん」

宇山「このイルグンは有名なゼエブ・ジャボチンスキーが創設した過激派組織でありますけれども、この過激派の本領発揮ということですね、長崎の式典にケチをつけているのが、私は、このエマニュエルだというように思うんです。一方、私は、長崎市長のこの対応もねえ、おかしいと思っているんです。彼はロシアやベラルーシも呼んではおりません」

水島「うん」

宇山「犠牲者を追悼するのに、国際政治を持ち込むべきではないというように思うんです。本来、イスラエルもロシアもベラルーシも、皆、呼べばよいというように私は思っているんです。背景に何があろうと関係が無いと、まあ、騒ぎが起きるから呼ばなかった等と言うのは、私は招待をしないことの原因にはならないだろうというように思います」

水島「はい」

宇山「騒ぎを起こしてでも、きちんと呼んで多くの犠牲者を出した地の首長として、無益な戦争は辞めなさいということを彼らに説いて聞かせることこそやるべきなのに、それをしなかったというのは残念であります。また、具体的な大東亜戦争の項目については、後程、皆さんと議論させて戴きたいと思っております。以上です」

水島「はい。どうも有難うございます。今、ご指摘の問題について少し触れてみたいと思っております。現実には、オリンピックではイスラエルは招待されている。パレスチナっ

ていうのは、どっちかって言うと、ヨルダン西岸のパレスチナ自治区という人達と呼ばれている。っていう、まあ、あのう、出演はしていますけど、ロシア、ベラルーシは呼ばれていないという状態で行われました。これはパラリンピックも同じだと思いますね。それでは、用田さん、お願いします」

用田「はい。どうも。お久しぶりです、と言ったら宜しいんでしょうか（微笑）」

水島「(笑)」

用田「6月には珍しく体調を壊しまして、お陰様で、もう一回、頭の整理をするということで時間を使いまして、あちこち整理をさせて戴きました」

水島「はい」

用田「今日の話では、このテーマに書いてある通り、私は、とにかく軍事的な側面からお話をしますけども、大東亜戦争の意義というもので、もう一つは、今のアメリカの一極支配の脱却、脱却と言うよりも一極支配は壊れて来ていると。軍事的に見た時ですね。それから、この話と、それに続く新世界秩序の転換というのは決してバラ色ではないと」

水島「うん」

用田「所謂、グローバリスト達が狙っている新しい時代、所謂、New World Order というのは地獄の世界ですから。それが今、現出しようとしている。私の声は出ていますか」

水島「今、地獄の世界ですから、というところまではハッキリしていましたが、そのあとから、もう一回、戴けますか」

用田「はい。新世界秩序の転換というのは、基本的にグローバリズムの言うところの New World Order というのは地獄の世界ですと。こういうことです。それで大東亜戦争、そして、今、さっき折本さんがおっしゃられたように未だ戦争は続いているということについて、私もそう思います。大東亜戦争で、我々は戦争自体、敗戦を喫した訳ですけども、そこで、一度、敗戦をして、今現在、二度目の敗戦を迎えていると」

水島「うん」

用田「この自覚が日本にあるかどうかということで、日本と世界が立ち直るかと、これは、最後のところでも、ちょっとお話ししたいんですけど、トランプが本当に大統領になった時に世界と日本が救えるかと言った時、日本が救えるなんて考えない方がいいと思います。

日本が、ちゃんと自立をしないということはアメリカから自立をするということであって、その意識が無い。それは、二度目の敗戦を今、迎えているという意識が必要だということが大切だと思います。それで基本的には大東亜戦争も今も、大分、言葉が、グローバリズムという言葉が、ずっと出て来ていますから、それを使わせて戴きますけども、グローバリズムというのは決して美しい言葉じゃなくて、一言で言えば、反国家共同体であって反国家主権、国家主権を奪ってしまうと、一言で言ってしまうと、これがグローバリズムの本質だという風に思っています」

水島「はい」

用田「グローバリズムとは民族、文化、伝統を破壊して国家を解体すると。そして、伝統的価値観や宗教を真っ向から否定して、人間性を破壊すると。最終的に国家主権を奪って従順な世界市民に持って行くと。今迄、こういう話をすると、絵空事みたいな話をしているじゃないと言われましたけども、もう、その馬脚というのは既に出ておりました、これは正々堂々と正面から捉えて話さなきゃいけないと。

先程、申し上げました人間性を破壊するというのは、パリのオリンピックの開会式、閉会式をご覧になったと思いますが、おぞましい光景がありましたよね。正に反宗教であり反伝統、所謂、伝統的価値観に真っ向から勝負しているんですよね。人間というものの道徳観に対して。彼らのやっている事は最後の晚餐、所謂、開会式で最後の晚餐ということ踏みにじって最後は悪魔崇拝ですよ。悪魔に対して崇拝をするというのでクローズした。だから、所謂、ソドム (Sodom) とゴモラ (Gomorra) と、これはキリスト教の世界で言われているように、両方共、享樂の果てに神から滅ぼされた国ですよ。

ソドムというパリというものから今度はゴモラのロサンゼルスへ移ると。これが今回の絵姿で見せられて、我々は未だこういう世界の中についていくのかということ、しっかりと、考えなきゃいけないということが一つですね。大東亜戦争については、正にグローバリズムという観点からすると、植民地支配ということで国家とか国境を破壊してしまうという欧米が居たと。

そして、人種差別をして人格を破壊するという欧米が居たと。正に、私が申し上げたようにグローバリズムの特色そのものですよね。それに向かって日本は立ち向かった訳ですよ。ある意味、日本は尊敬をされるという部分があったと思います。しかし、今の日本は、日本自体が自らグローバリズムになって、更にグローバルストの言いなりになって右往左往するという惨めな姿である。それは、多くの世界の希望というものを踏みにじっているし、今の日本がやっているのは、先の大戦で戦った日本人に対する冒瀆ですよ。

私が言っているのは、言葉が強いという風に思われるかもしれないけれど、そうじゃなくて、軍事的、経済的、文明的に色々な話を考えた時、本当に全てを破壊している。それは全てを破壊している原点を見ると、今の日本が典型的な例ですよ。何処を見ろと言っても今の日本がグローバリズムに染まって悪い膿が出ている姿自体が、今の日本そのものと。

そういうことで残念ながら、我々日本人は今の状況では世界からも尊敬されない。グローバルストの敵ということは、トランプの敵になるっていうことですよ。自分達がやっていること自体が全く分かっていないと思うんですけどね。

それと、もう一つ、これは話が少し飛ぶかもしれませんが、カスピ海ルートと言って、岸田首相が中央アジアに飛ぼうとしましたね。どういう訳か止めましたけども。びっくりしたんだけど、あれはロシア、アゼルバイジャン、イラン、インドと繋がる南北回路を横にぶち切るルートですよ」

水島「そうですね」

用田「それは中央アジアからヨーロッパに繋ぐ訳ですよ。それは何ですか。日本人の為ですか。誰の為にやっているんですか。そしてカスピ海とアゼルバイジャン、これはロシア、トルコ、イラン、これだって大きなテリトリーですよ。アゼルバイジャンも変わって来ようとしていますけども、どういった国に対して横軸を入れるのかと。まあ、今回、

やめたのは誰が言ったのか知りませんが、少なくとも、よかったという面はあるんだけど、事程左様に日本は完全に大東亜戦争の日本の大きな名声も吹き飛ばしているし、現実の問題として、国を破壊する方向に持って行っているということに於いて、実に日本人自身の心を踏みにじっているということになると思います。

このあと、軍事的にアメリカの一極支配というやつが崩れ、そして違う世界が出来ようとするっていうことについて、若干、時間のある限りお話をしたいと思っています。以上」

水島「はい。有難うございます。さっき施さんがおっしゃった『歴史の語り方』というものが、やっぱり、ああいう教科書問題とか、我々もずっとやってきましたけど、つまり、よそ事っていうか他人事っていうね、向こうにあるものとして勝手に今の人間が昔とか戦前とか戦中とか、こういうものを判断している。自分達の基準で、ずっと語っているっていうね、全然、届いていないから、間違った見方で、こういうことがあるので、今言った様に具体的な事の中で、やっぱり歴史っていうのは語らなきゃいけないし、考えなきゃいけない。

向こうに歴史がポンとあるんじゃないかと、自分もその一部だという意識が無いとね。一応、皆さんからお話を伺いましたけども、大高さん、ちょっと短かったから何か付け加える事がありますか」

大高「はい。長崎の件で、私も思うことがありまして、保守系の方々のツイッターを見ると、殆どが長崎市長は凄い糾弾しているんです。だけれども、何故、ラーム・イスラエル・エマニュエル駐日大使の名前が出て来ないのか」

水島「批判していないんだよね」

大高「不思議なんですよ」

水島「戦後保守っていうのはね」

大高「そう。で、イスラエル…」

水島「拝米保守というのかな」

大高「イスラエル大使が批判するなら、国を代表してっていうので解りますよ。長崎と丁々発止やるの。何故、部外者のアメリカの大使が、ここまで出て来て、はっきり言って、これ、梯子を外されたっていうのが明白に見えた訳ですよ。エマニュエルさんに命令されてウクライナ支援まで決めて、何兆円も涙ぐましい努力をして何とかやりますってやって来た訳ですよ。

それに異議も唱えて来ない日本人の存在があって、そこまで欧米のG7に尽くしたって、この様かと。どうして、そこを直視しようとしらないのか、これが問題だと、私は思っています。それで、じゃあ、何故、欧米、G7がそこまでアメリカのエマニュエルさん如きに合わせて、長崎の式典の出席を見送ったのかと」

水島「うん」

大高「ここは、やっぱり宇山さんも暗に触れていましたけれども、やっぱりユダヤの方々の力に屈した訳ですよ」

水島「まあ、そうだよね」

大高「じゃあ、何故、彼らは、そんな力を持っているのかということ、私は別に安っぽいユダヤ陰謀論とか言うつもりはなくて、数字で見ると解り易いと思うので、データを作ってきたんですけども、やっぱり、これが怖いんですよ。欧米の人達も、これ、ホロコーストの生き残りのフィンケルスタインさんが色々指摘されて来たことですけども、まあ、ホロコースト賠償産業と、ご本人はおっしゃっていて、ドイツが1956年から2009年までの間にユダヤの団体の方に支払った金額が11兆円。賠償金の返済が終わったのが2010年、第一次世界大戦後から90年近く経って、これが200兆円ですよ」

水島「うん」

大高「それから、あと2022年も今度、ポーランドがナチス・ドイツの侵攻の被害に対して183兆円に上る賠償金を請求し、ドイツは賠償問題解決済みだと言っているけれども、ドイツとしては非常に緊張した状態にあるんですね。実は、スイスもクリントン政権時代に、えらい目に遭っていて、スイスもホロコーストの生存者に対して、和解に、もう、これねえ、凄い手口だったんですけどね、この裁判の成り行き見たら、和解で2173億2381万円、3億円ぐらいは支払っていたとか、あと2023年もドイツに対するユダヤ人の物品請求に関する会議で1億7500万ドルの増額で、いまだに戦後賠償を支払い続けている訳です」

水島「まあ、2024年の時点でもね」

大高「はい」

水島「はい」

大高「世界中で、12万8千人以上のホロコースト生存者に影響を与えていると。フィンケルスタイン教授とかは絶滅寸前までされたのに何故、毎年、生存者の数が増えるんだということも指摘されているんですけども、ユダヤ系の団体の賠償請求はこれだけじゃないんですよ。東欧にもしていたし、欧州は非常に戦後賠償、ホロコーストっていうのに関して恐れている訳ですよ。非常に弁護士と組織力があるから。こういうのも今回の屈した背景の一つの要因にあるのではないかということですよ」

水島「そうですね」

大高「実は戦後賠償で日本の慰安婦、南京も、ここと繋がる部分があります」

水島「うん、そういうのを狙っているっていうね」

大高「うん」

水島「はい。今、言ってくれたように、もう一つ言っておかなきゃいけないのはウィーゼンタール協会かな」

大高「はい」

水島「20年近く前かな、私が600万人っていうような発表があったんでね、いや、あのユダヤ人に対する虐殺や弾圧はあったかも分からないけど、その数の600万というのは、いくらなんでも正確じゃないんじゃないかって言ったら話しに来たっていうこと

で、こちらのスタジオにウィーゼンタール協会の二人が来て、私も、そんな600万っていう数は、あり得ないでしょっていう話をしたら、数はともかくっていうところで、その時は、収まっちゃったんだけどね。

ただ、益々、こういう事実関係をはっきりしないままということは、やっぱり、あるということ、我々、指摘しなきゃいけない。それから宇山さんも指摘して下さったように、この問題はタブーみたいな形でね、まあ、ホロコースト批判というかな、こういうことがあるっていうこと、でも、私は、これを言っていますし、現実にはナチス・ドイツが敗戦して崩壊したあと、200万人以上のドイツ人が虐殺されている。

これは、ポーランド人やエストニア人、あの辺の人達、それからユダヤ人、こういう人達によって200万人以上が殺されているし、レイプもされているしね、こういうことも実際、起きている。戦争の敗者や勝者によって、こういうことも起きていると、我々は事実として認めていかなきゃいけない。

先程、施さんがおっしゃったように、歴史の語り方がね、一方的な部分だけ語って、こっちの部分もやられた方とか、負けた方の部分が語られない。或いは、リンドバーグさんというあの有名なパイロットだった人が言っている様に、所謂、太平洋上の島々の戦いでは日本兵を捕虜にするっていうことはしないと。全員、殺すと。所謂、万歳突撃で、我々の国の兵隊さん達は突撃して殺されたのもあったけども、現実には捕虜になった人達も、みんな、殺された。生き残らせないというのは方針だったとかね。

実際は、こういうことが、ちょこちょこ、ちょぼちょぼ、実際は出て来るんで、私達は、この見方も、ちゃんと言っておかなきゃいけない。お前がやったからこっちがやったとか、そういう言い方じゃなくて、現実には戦争では、そういうことが起きているというね」

大高「社長、おっしゃったサイモン・ウィーゼンタールが、この長崎の問題の発端ですよ」

水島「うん、そうです」

大高「サイモン・ウィーゼンタールのクーパー氏が、先月ですかね、長崎に対してクレームを出した訳ですよ。それが原点ですよ。それで、私にも、その時、クレームを出したけども、二度に渡って7月31日にも、また同じようなクレームを長崎に出していて、それで産経新聞がそのサイモン・ウィーゼンタールのことを二度に渡って報道している訳ですよ」

水島「うん」

大高「けども大事な点が抜けていたのは、このサイモン・ウィーゼンタールはこう言っているんですよ。クーパー氏は『長崎に投下された原子爆弾は日本がナチス・ドイツと同盟を結んだ第二次世界大戦をついに終結させた』と。それでサイモン・ウィーゼンタールの見方というのは、クーパー氏は戦後一貫して原爆の正当化をずっと言っている訳ですよ。こういう団体な訳ですよ」

水島「だから、その一環で、ずっとやっているっていうことでね」

大高「そう」

水島「だから、ガザ地区の問題も同じ発想で、そういう流れの中にあるんじゃないかというね。自分達の言うことを聞かない、武装闘争として敵対する人間は絶滅させてもいいというね。それから完全に無力化して今みたいな日本人の何か馬鹿みたいな羊みらいになった日本人になれば、褒めてとらすという、金だけ取るという状態がね、これねえ、一応、言っておきますと、今、もう討論が始まっているからあれですけど、別に我々は反ユダヤ主義を標榜しようなんて思っていない。事実をちゃんとやりましょうということを行っているだけであってね」

大高「そうなんです」

水島「事実は、実際、そういう形です。まあ、先程、言った様に200万人以上のドイツ人も殺されているっていうね、これはニュールンベルグ裁判（綱領）では採り挙げられないんですよ」

大高「うん」

水島「この敗戦というかドイツ・ナチスが崩壊したあと、ドイツ人がどういう目に遭ったか。ポーランド地区に居た、或いは、ずっと東ドイツだった所とかに居た人達が、どういう目に遭ったかというのも全く報道されていないし、ドイツ人自体も、それを言う事がいけないことのようになっているっていうね。

あのフラ作戦だって、所謂、北方領土、占守島から国後、択捉まで、ソ連軍が侵入して来て、北海道の人達は口助の野郎は酷いことをやったと言っているけれども、現実には、そのソ連兵を運んだのはアメリカの軍艦で、はい、終わったら次の島へ行くよおって言って、みんなを乗せて、また次の島へ行ってソ連兵に戦わしてっていう」

大高「ソ連兵の士気を教育していた」

水島「これは、もう共同作戦」

大高「うん」

水島「でも、この共同作戦の部分、フラ作戦のアメリカ軍の関与というのが全く報道されていないというようなことも含めてね、私達は…」

大高「保守系の人に、それを言ったんですよ。そうしたら見ようとしませんですよ」

水島「そう。だからね、そうなんだよ、だから（苦笑）」

大高「何故だろうと思った」

水島「だから、もう頭の中はソ連が約束を破って侵入してというだけになっちゃっている。これはルーズベルトと相談の上、ちゃんとやっているんだっていうことが全く伝えられていない。

ポツダム体制っていうのは、そういう体制だったっていう問題も、我々は、繰り返し大東亜戦争の討論でも言ってきた訳ですけど、もう一つ言うと、そういう意味での罪悪っていうのかな、そういう罪とかの問題だけじゃなくて、現実には、私は、ちょっとタイトルで、チャンネル桜の番組で言ったけど、所謂、イスラエル、括弧付き『イスラエル』が欧米諸国を支配している。

支配者は欧米諸国のことじゃなくて、実は、括弧付きの『イスラエル』つまりユダヤの国際金融資本とかエネルギー・メジャーとか軍産複合体とか、こういう国際的なもの、こういう人達が、実は、しっかり支配力を持ってやっているんじゃないか。その手先になって喜んで、あっちへ行ったり、こっちへ行ったりしているのが、うちの増税メガネさんという状態ではないかということですけども、そういう意味では非常に情けないですけども、この問題は、宇山さんや皆さんからも、あのエマニュエル大使の欠席っていうことがありますけど、意見がありましたら聞いてみたいんですけど、どうですか」

モーガン「あ、私ですか」

水島「はい」

モーガン「そのエマニュエル大使と出席問題を見て、まあ、そういうもんだと思ったんですよ。先程、ホロコーストの話があったんですけども、ホロコーストは二つの意味があると思ひまして、一つは実際にナチス・ドイツがやったことがホロコーストで、もう一つの意味は、相手を潰す為に使える政治的な道具のホロコースト。私はその政治的な武器として使われているホロコーストと戦ったことがあるんですよ。

実は、ジョン・マーク・ラムザイヤー（John Mark Ramseyer）先生と二人で、この慰安婦問題に関する本を出したんですが、慰安婦問題は、やっぱりバックが北朝鮮とか中国じゃないですか。共産党もバックにあるし、慰安婦問題って、そもそも慰安婦は性奴隷じゃなかったとやって言ったら、お前達はホロコーストを否定していると直ぐに言われたんですよ。お前達はヒトラーのような存在だとか、いやいやホロコーストについては一回も言及したことが無いのに、しかもホロコーストを否定していないのに、直ぐお前達はホロコーストを否定している人間ですとレッテルを…」

大高「アメリカの学者が…」

モーガン「アメリカの学者にレッテルを貼られて、アメリカでホロコーストは、そのような使い方ですよ。先程、ホロコースト産業が出ましたがノーマン・ゲーリー・フィンケルスタイン（Norman Gary Finkelstein）がお書きになった通りだと思いますよ。彼も、自分の親が一人がアウシュビッツ、もう一人が…」

大高「うん、そう。ビルケナウかな」

モーガン「そうです。そうです」

大高「はい」

モーガン「その人がホロコーストを否定するはずがないじゃないですか。自分のご両親が、そんな目に遭ったのに、でもフィンケルスタインさんもホロコーストを否定していると言われていて、これには大きな意味があると思いますよ。そのあとエマニュエル総督府、エマニュエルが言ったのは、要は、ロシアとイスラエルがやっていることは一緒だと考えている長崎市長が悪いと、要は、エマニュエルと米国が道徳的な正義を持っているかのような立場に居ると。それが大前提になっている訳です。そのような中でホロコーストが使われているんですよ。

そのエマニュエルが言った Moral Equivalents、Moral Equivalents という言葉で、私は、啞然として、自分の耳を疑いました。Moral Equivalents。加害者が被害者に対して道徳を

巡るお説教をする立場こそがワシントンです」

大高「うん」

モーガン「ピューリタンから始まった非常に歪な宗教的なテロリストが、そのアメリカ大陸に居てジェノサイドをやった。そのあと奴隷を、アフリカ人を拉致して奴隷させて、そのあと、ベトナムに対して、日本に対してジェノサイドを繰り返す連中です。罪悪感は何論、あるんですよ。第二次世界大戦の意味は、いやいや、いや、私達は善い人ですよと。あのナチス・ドイツと戦った連中、こっち側は善い人ですよと。自分の罪悪感を慰める為にもホロコーストを使っているんですよ。それは一切、変わらないですし、冒頭で申し上げた通り、欧米では、人種差別は一切、終わったことが無いんですよ。ただただ第二次世界大戦のあと、あのホロコーストは酷過ぎて、いや、自分達も反ユダヤだったですよ。

ワシントンは他の人種に対しても酷いことやったよ。今まで通りやれなくなったので、じゃあ、これからはグローバル・スタンダードとか言葉を替えて綺麗事をして善い事をやっているかのように言うようになったんですよ。

その長崎の最近の事件を見ると、その繰り返しですよ。自分達がやったことは悪いと言わないですし、謝罪はしないし、逆に被害者を責める立場を、ずっとイスラエルは、要はイスラエルっていう国は、自分達、ワシントンとかがやったことを隠してくれる存在。私達はホロコーストを終わらせた正義側ですよ。その歪な中でホロコーストをやり続けている今のイスラエルは代理戦争みたいに、どうしても非白人を殺したいんだけど、事実上、それは、難しくなっているんで、他の人にやってくれる代理ホロコーストをイスラエルがやってくれている。

その連中が、この日本を支配していますし、その南京、長崎のあと、その姿勢は何回も見ただことがあるんですよ。でも本当にガッカリして気持ちが悪くなったのは、日本の保守がイスラエルを庇って…」

大高「うん」

水島「そうなんです」

モーガン「アメリカ大使を庇って…」

水島「そうなんですよ」

モーガン「ここで日本国民に話をしたいんですけども、右か左かノンポリとか関係なく、長崎ではワシントンが日本に対してジェノサイドをやった。広島もそうですが、東京空襲もそうですが、その日本人に対してジェノサイドをやった組織、そのワシントンを庇っている日本人。貴方は、どう思いますか。政治問題じゃないですよ。右左とか、そうじゃなくて、どう思っていますか。あの人は自分の国民っていうんですけども、あの人は人間レベルでは、どう思いますか。その連中がワシントンの為に、事実上、この国を支配しているんですよ。

もう一つ、先程、用田先生が敗戦という言葉をおっしゃったかと思うんですが、戦いに敗れたと折本先生もおっしゃったかと思うんですが、私は、ちょっと違うと思います。戦いに敗れた、もっと正式的に言うと、多分、途中で、これは戦争じゃなくてジェノサイドだと判ったと思います。日本側は多分、普通に戦争を戦っていると思っていて、普通につて

言うか、戦争をやっていて、でも途中から相手がクレイジーだと気が付いたと思います。それで天皇陛下が、いや、もう、これ以上はやめましようっていう風におっしゃって、非常に人道的な終わり方をした。これは戦争に敗れた訳じゃなくて、天皇陛下が、もうジェノサイドだと、多分、お解りになって…」

水島「そう言っておられましたね」

モーガン「戦争が終わったと思います」

水島「終戦の詔勅でね」

モーガン「そうです」

水島「はい」

モーガン「最後一点ですよ。たまたま最近、この本を読んでいるんですけども、このプロビール・シャーカーという方がお書きになった本です。この方です。実際にお目にかかったことがございます。とても立派な研究者と思うんですが、この御本の中で中村屋の相馬さん達がやったことも、ボースを隠す、もうイギリスの警察とか日本の警察が探していて、一般国民がその人を匿って、90年前の話ですけども、その当ても政府は駄目だったんですよ。

その当ても政府は外国の為に日本人を苦しめる、何も変わっていないですよ。日本人の精神も変わっていないと思うんですよ」

水島「うん」

モーガン「今でも、このような立派な相馬さん達のような普通の立派な日本人がいっぱい居ると思います。この本の中、たまたまバンラデッシュの歴史の一章があるんですよ。バンラデッシュでは、私は最近、バンラデッシュの事を見て、これは絶対、CIAがやったこと、ワシントンのクーデターってインドのニュースを見れば、そう言っているインドの方が多いんですよ」

水島「うん」

モーガン「要は、昔、八紘一宇っていう考え方があって、みんなが共存する。みんなが一緒に暮らすっていう考えで、それが無くなった。今、アジアの方々は板挟み。中国の一路とてんとんでもない道か、ワシントンの支配っていう、もっと、とんでもない道のどっちか、アジアは悶えている中、今こそ日本が必要ですよ。

日本が立ち上がって、もう一度、アジアを新しい植民地時代から導いて、新しく中国っていうモンスターとワシントンというジェノサイドが大好きなサイコパスの連中と、その両方から解放させる。

安濃豊先生がお書きになった、この御本、私、大好きですよ。アジアを解放することが戦争の目的、そういった意味で、日本は戦争で負けていないんですよ。あの日本は大勝利を収めたんですよ。ただ敵の酷さは途中から判って、その敵が日本を占領するようになったんですが、日本が生贄になってアジアは解放されたんですよ。こうやったのは日本ですよ。

今、必要なのは米の一極支配脱却の為にも新しい世界秩序を築く為にも、大東亜戦争の意義と大義が80年90年前よりも今、必要だと考えています。今、見て下さい、バングラデッシュとかワシントンと中国が世界を操っているんですよ。その中国は共産主義、共産党とか、欧米の影響を受けてやっているんですよ」

水島「うん」

モーガン「中国は前からジェノサイドが好きですけども、共産主義を身に付けて、もっともってジェノサイドが好きになって、ジェノサイドのワシントンかジェノサイドのチャイナかじゃなくて、日本という、もう一つの道が、まだまだ、あると、私は信じています」

水島「そうですね。はい。施さん、どうですか」

施「そうですね、今、モーガン先生がおっしゃって下さったことで、この大東亜戦争の正に、理念ですね。今、正に私としては先生が触れて下さって非常に嬉しかったんですけど、その中村屋のボースの話ですね。あの話っていうのは、私は福岡出身ですので、ボースを匿った頭山満が生まれた辺りで育ったと言いますか…」

モーガン「いや、むしろ大好きです。大好き」

施「ええ。私の中学校、高校の両方とも近くにあったんですけども、頭山満の生まれた家というのが本当に直ぐ近くで、頭山満が生まれた時に、頭山満のお父さんが大きな楠木を庭に植えたんですね。福岡市早良区の西新という所ですけども、頭山満は、そこで育ったんですけども、その頭山満が生まれた時に父親が記念に植えた楠木が今、非常に大きな楠木になっているんですね。

その場所は、通り一本挟んで、別の所、向かいの大きな通りの向かい側に移しているんですけど、その楠木は今でも大きくきちんと茂っているんですね。ただ、福岡市民は、頭山満と、その頭山満の楠木がきちんと育って、それが本当に小さな公園になっているんですが、ただ、恐らく福岡市民の10%も知らないでしょうね、その頭山満が何をやった人か、また、その彼がどういう理念を持っていたか、また、その楠木というのが今でも福岡市の西の繁華街の所にきちんと繁っているということですねえ。これは多分、日本人も地元福岡市民も多分、10%も知らないんじゃないかなあと思うんですよ。

恥ずかしながら、私も高校生の時、知らなかったんですね。私の高校は頭山満と非常に関係が深い、実は、今日、ご出席の用田先生も私の先輩で同じ高校の卒業生ですけども、本当に非常に頭山満と近い関係のある高校ですけども、その高校でさえ、頭山満について教えない訳ですね。その頭山満の話にしても、その頭山満に非常に関わりの深い土地にしても、楠木にしても、私は、そこをきちんと教えるべきだと思いますね。

その時、正に大東亜戦争の理念の中の非常に良質な部分ですね。それというのは正に、先程、先生がおっしゃったような中村屋の話でもありますけれども、アジア諸国の独立運動のリーダーというのに、その頭山満は、頑張りよと、明治維新の輸出であるという形で、それぞれのアジアの国々が、きちんと国造りをして、ちゃんと自前の国をもって、きちんと尊厳ある生活が出来るようにと。

それでアジア諸国の国造り独立というのを支えようとしたんですね。その革命家に金を配ったり支援をしたり、何か、これが大東亜戦争の意義の本当に良質な部分だと思うんです

ね。ですから、我々は戦争に負けたとしても、この理念の良質な部分っていうのを語り継いで、今の時代に於いて、どう生かしていくかだと思っうんですね。

これもモーガン先生がご指摘下さったことですが、日本政府自身は、やはり、この国際政治の中で、我々は日本の理念っていうのを上手くきちんと訴えることが出来なかったんですね。ですからイギリス政府から、あの時は、日英同盟を大義名分として、ちゃんとボースを引き渡せと言われてたんでしようけれども、それで政府が引き渡そうとしたところを、頭山満とか中村屋の人とかが匿ってということだったんですね。

それで独立運動を陰から支援したということですが、ですから、この理念っていうのは、私は、今でも日本国民、日本の普通の人々は大いに支持すると思っうんですね。つまり、それぞれの民族、国民が自前の国っていうのを、きちんと作って、そして国造りをして、そしてグローバリストと反対に多数の色々なそれぞれの文化、伝統を大切にす多数の国々が共存共栄する世界ですね。

そういう正に今日のタイトルでもありますけど、ワシントン一極支配ではなくて、多様な視野、国々からなる多様な世界ですね。我々は、そういう世界を創っていくんだと。その中国のある種の中国型グローバリズムでもなく北京型グローバリズムでもなく、ワシントン型グローバリズムでもなく、我々は多神教の国として、多神教の伝統を持つ国として、まあ、そういう多様な世界を創っていくんだと。そして、多数の文化伝統になった、それぞれの国々が、なるべく経済的にも権力の面でも、なるべく対等に、共存共栄を図って多様な世界を創っていくのだと。

そういう理念っていうのは、やっぱり訴えていくべきだと思っうんですね。それが、私は日本の使命であり、正に、その中で日本が名誉ある地位を占めるっていうのが、先人の理念に副うことじゃないのかなあなんていう風に思っうんですね。それを考えると、先程、宇山さんがおっしゃったように、私もどうなんですかね、私も長崎の場合、広島でも長崎でも、私は、あの原爆の日には、ロシア、ベラルーシも含めてイスラエルも含めて全部、声をかけて呼ぶべきじゃないかなあと思っうんですね。どうなんでしょうね。私は争いの中で、どちらが正しかったっていう風に白黒つけるっていうのは、どちらかと言うと、日本の考え方じゃないんじゃないかなあと思っうんですね。

日本は正に喧嘩両成敗の国だと。だから極端な話ですね、喧嘩しているんだったら呼ばないよっていうのも一つだと思っうんですが、だから何か戦争しているんだったら、ウクライナもロシアも欧米も呼ばんぞみたいな感じでやってもいいのかもしれませんが、それでは追悼にならないので、私はどちらかと言うと、全部の国に声をかけて政治的な問題が色々あるけれども、それは、ひとまず置いておいて、ここでは、まず慰霊をして下さいよと。そういう風に言うべきではなかったのかなあなんていう風にも思っうんですね、はい」

水島「まあ、この辺は、皆さんの意見、聞きたいんですけど、さっき言った、どうしても、私はね、慰霊は、みんなで作って貰うけれども、まず原爆を落としたアメリカに謝って貰いたいと思っうんですよ。これは、どんなことがあっても許されることじゃないと思っうんですよ。だから、まして、イスラエルを呼ばないなら、俺は行かないんだよなんて言えるような立場か、お前はっていう感じがあるんでね。

まず、私は今回、日本政府が抗議の声明を出すとかね、まず謝罪しなさいと。それから偉

そんなことを言うなら言えという様な気もするんですけど、これで言うと、段々、キリが無くなって来るんですけども、まず加害者側とか何かっていうの、お前らが悪いからやれたんだよっていうことじゃないですか、基本的にはね、でも本当にそうなのかというね、この問題は、やっぱり大東亜戦争っていう問題は、我々が、もうアメリカをぶっ飛ばして、やっつけてやろうなんて本当に考えたのかって、誰も陸軍も海軍も基本的にはスパイという噂もあるというね、山本元帥ですら数年は頑張るけどね、あとは駄目だよって言うぐらい冷徹に見ていたんじゃないかと、これは山本元帥に対しての歴史の見方が色々ありますから、私がそう思っている訳じゃないですけども、ただ、そういう意見もあるということ、陸軍の反対とか、あれを無視して行ったということなんかを見ると、そういう見方もあるということですけども、実は頭山翁の頭山満の自書ですね。

洗心、心を洗うという、これは頭山興助さんっていう方から、水島さん、持っていてくれということで大分、前に戴きました。中々興味深い字ですね。心を洗うです。はい、どうも有難う。そういうようなことで、それとアジア主義ですね。この問題も討論されなきゃいけない。アジアの中で、もう一つ、これもキリが無いんですけども、中国の問題も今、中国共産党だから駄目なのか、或いは政権が替われば、中国の政治体制が変われば、我々は仲良くできるのかとか、私達は、やっぱり論語とか朱子学を含めて、こういうものは相当、影響を受けている、皇室の場合も明治維新までは廃仏毀釈とかない、ある迄は、仏教も、まあ、所謂、その今言った朱子学含めて儒学ですね。儒教、こういうものを含めて、皇室の中に取り入れられていた。

ただ、明治維新の中で、これが仏教とか、そういうものが一切、消されていった。特に皇室の祭祀から、そういうものが消されて行ったっていうね、これも明治維新が果たして、どういう形で、我々が捉えた方がいいのか。近代化を取り入れようとして本当に果たして成功したのか。

それと、もう一つ言うと、皇国イデオロギーとか言われるもの、天皇を現人神として認める側と認めない、所謂、イデオロギー化していったというか、皇国史観というかイデオロギーというか、我々が哲学だったり世界観だったりした皇室の存在が、いつの間にか、そういう形の政治的な存在にならざるを得なかった。

井上毅っていう人が大日本帝国憲法を創られた時、色んな形で苦労したけども、我々は未ださっき、おっしゃったように大東亜戦争自体が続いているんじゃないかっていうのは、明治維新の西洋の近代文明とかそういうものを、どのぐらい呑み込んだり熟したり、日本の歴史は、仏教でも何でも熟して来たんですけど、日本化して来たんだけど、未だ、それが成功したのかどうか、これも議論が今、おっしゃったようにあると思うんでね」

モーガン「続いているのは、その戦争が続いているのは、あの欧米、あの西洋のパワーは、未だ衰えていないということだと思います」

水島「はい、そういうことなんです」

モーガン「世界がこうなっている事は全て欧米に由来すると思います」

水島「そうですね」

モーガン「欧米が全世界を支配するように、勿論、昔、戦争があったとか、それは、そうですけども、西洋ってジェノサイドの民族ですよ。欧米は北米に行って南米に行って、

その当時の人口の96%が削減されたと言われています。勿論、病気もあったんですけども、一切、反省しないで、もうハイチに対するフランスがやった一例だけを見れば、欧米の本質がよく解ると思うんですが、その革命を起こしたハイチに対しても賠償しろと」

水島「うん」

モーガン「それで200年ぐらいかけて、やっと賠償を払い終えた。しかも奴隷が反逆して革命を起こした。それでフランスが、それに対して賠償を払ってくれて、それが欧米ですね。ということは、今になっても戦争が続いているって言うのは、欧米を終わらせなければならぬと思いますよ」

水島「うん」

モーガン「長崎もそうですが広島もそうですが、世界の長崎とか世界の広島とか、具体性に欠けている」

水島「うん」

モーガン「具体的に誰がやったのかと言えない状態が、私からすれば非常におかしいと思います」

水島「はい、そうですね」

モーガン「平和の為、いいですよ。平和の為に祈るとか、それはいいけれども、何故、この町が灰塵になったのか、ここに居た大勢の人々が一気に殺されたのか殺戮されたのか。そのような式典があるのはいいですけども、具体的に誰がやったのかと言えないのは、欧米が未だこの国を支配しているからと。特に欧米を責める必要とか永遠まで嫌うとか、そうじゃないですよ。でも、その欧米の力を砕いて粉々にしなければ、このアジアとかアフリカとかは解放されない。米一極支配イコール、欧米の考えが未だ通るので、そういう意味では戦争が終わらないと思います」

水島「うん。その通りですね」

モーガン「今、施先生がおっしゃったことは理想だと思うんですよ。今から、その理想までの道は、正直なところ血まみれの道ですよ。今から、その理想迄、辿り着くまで相当な暴力を振るわなければならないと思います。その覚悟があるかどうかは次の課題だと考えています」

水島「そうですね。まあ、血と汗と涙がね」

モーガン「はい。血と汗と涙」

水島「必要だというね」

モーガン「はい。あとは覚悟が必要です」

水島「はい。典型的だったのは、以前、今の長崎市長じゃなくて、もう10～15年以上前ですかね、もっと前か。当時の長崎市長は原爆が落とされたのは当たり前だと。我々は悪いことをやったんだからというような発言をしたことで所謂、右翼という人に銃撃されたということがありまして、それが典型ですね」

モーガン「そう」

水島「自分達が悪い事を行ったから撃たれたのはしょうがないと。抗議なんかしないって、その長崎市長は言ったんですね」

モーガン「拝米保守もそう思っているんじゃないですか」

水島「まあ、そういうことでしょうね。イスラエルまで…」

モーガン「日本人を殺戮して良かったと思っているんですよ」

水島「はい」

モーガン「ガザの人々を殺戮してもいいんじゃないかと」

宇山「あ、宜しいですか」

水島「宇山さん」

モーガン「あ、すみません」

水島「はい。宇山さん、どうぞ」

宇山「あ、宜しいでしょうか」

水島「はい」

宇山「先程の長崎の式典の件で、大高さんがおっしゃられたことに、私は非常に同感なんですね」

水島「うん」

宇山「何やら、長崎の市長が悪いというようなことで、今、批判が集まっているでしょ」

水島「はい、そうなんですよ」

宇山「イスラエルを呼ばなかったという長崎市長が、これが、この騒動の根源なんだというような話で、保守と思し召しき言論人なんかも、そういうものの言い方をしているんですよ。それは確かに悪いですよ」

水島「そうですね」

宇山「先程、申し上げたように全部、呼ぶべきですよ。ロシアもベラルーシもイスラエルも全部、含めてね」

水島「うんうん」

宇山「ただ、その彼らが長崎市長を批判する背景に何があるかと言うと、結局、イスラエルを除け者にする長崎市長は左翼でけしからんという拝米主義的な意識というものが、私は、やっぱり根底にあるんだろうと思うんですよ」

水島「そうですね」

宇山「ええ。我々は、そこが違うんだということを、はっきりと言うべきであって、ま

た、この保守と思し召しきような人達が、こんな話に追随して、そうだ、そうだと言って、結局、拝米主義で国体を破壊するようなことに加担しているという、この構造を、ちゃんと気づかないといけない訳です。一応、主と言われるようなメディアでも、こういう調子で、長崎市長はけしからんと言うんですけれども、批判すべきはそこじゃないですよ。

先程から言うようにエマニュエルがイスラエルと一緒にあって、こういう擁護をしているということがおかしいということをお願いしているんですね。それから、今、モーガン先生が、先程から上手く、このジェノサイドとホロコーストの歴史について解説をして戴きました。正に、おっしゃるように欧米というのは歴史的にジェノサイドをやって来た国ですね。

それにも拘らず、最近、アメリカが日本に対して、お前達がやったホロコーストが酷いことをやって来ただろうと言って、この告発をした本というのがあります。もう視聴者の方もご覧の方も多いと思うんですけども、これが3月にアメリカから出ました Japan' s Holocaust という本です。水島社長、今、お手元に、この本の表紙のフリップがございませうか。はい。そうですね」

水島「ああ、これか、うん」

大高「これこれ」

水島「ん？これっ、ああ、これだね。はい」

宇山「はい。そうですね。この本について少し触れたいんですけどもね。日本とアメリカは一応、同盟を組んでおります。しかしアメリカ人が決して日本人を友人としては見ていないというように、私は思うんですね。日本は第二次大戦で戦った敵だと。所詮は、そういう見方をしており、利用できる相手としか見ていないだろうというように思うんです」

水島「うん」

宇山「この Japan' s Holocaust の中には、戦時中の日本人の残虐行為が執拗に描かれている訳ですね。日本兵が中国人の妊婦の腹を切り裂いて惨殺したとか、母親の目の前で幼児の首を切り落としたりとか、人間の肉を食ったとか、こういったことが縷々書かれている訳ですけども、アメリカ人が日本人のことを本当はどう考えているのか、嘘、偽りのないアメリカ人の意識というものが、この本の中に吐露されているというように思うんですね。

アメリカ人の物の考え方とか思考回路を理解する為の資料として、この本を注目すべきだと、私は思っているんですよ」

水島「そうですね」

宇山「まあ、こういう筆者のような特定の偏執的な学者だけが持っている考え方じゃなくて、こういう日本人に対する考え方はアメリカ人の一般理解と言ってもいいというようにさえ思うんですよ。その証拠にアメリカの学会から、この Japan' s Holocaust の本に対して、目立った反論も無く、広く著者の見解が、今日まで、ずっと受け入れられているんですね。そして、この本は欧米でも、よく売れている訳です。資料の2を出して戴きたいんですけどもね」

水島「はい。資料の2ですね」

宇山「はい。このJapan's Holocaustの一節をご紹介致しますけれども、こんなことが書かれてある訳です。『日本では、裕仁は〜』と呼び捨てしているんですけれども、まあ、昭和天皇の事を『裕仁は悪であり、神ではないと主張した人々は首を切られた』と」

水島「(失笑)」

宇山「『イスラム過激派諸国に於いてムハマドは殺人者であり、予言者では(音声途切れる)』」

水島「あれ？ちょっと、今、声が聞こえなくなっていますね。予言者…まあ、一応、続けて読んでおくと『イスラム過激派諸国に於いてムハマドは殺人者であり予言者ではないと主張した人々は虐殺された。』と『ロシアに於けるプーチン大統領の専制支配とウクライナに於ける不法戦争に抗議する人々は逮捕され、迫害され、時に殺害される』と。

これは宇山さんの翻訳ですけど。1940年に首を切られたって何処にも、そんな事実は無いんだけどね。本当に凄いなと。こんなインチキが、いや、それと、私は、南京の、あのう、これ、南京なんか殺とそのまま全部、言っちゃうと、不思議なことにバンされるんですよ。これを言うと言っただけでバンされる。だから言いませんけど、この問題で、映画2本、今、作っていますね。沢山の人に観て貰いましたけども、現実な問題として、私は南京にも取材に行きました。

最初、行った時は未だ戦後50年ぐらいで、日大の亡くなった先生ですけど、そういう戦争の間に2~3万人が殺されたことがあったと主張する人が居て、勉強していなかったから、そんなもんかなと思って行って、現実に南京の市民100人ぐらいにも秘かにインタビューして、当時60%が知らなかったですよ。戦後50年。今、79年ですけどね。ドキュメンタリーで行って、南京(大虐殺)知っていますかと聞いたら、いやいや、ああ知ってる、知ってる、蒋介石がやったんだよとかね。そのぐらい全く当時の中国の南京市では、こういうものについて知らない。ただキャンペーンとして映画が作られたりしていました。

これに乗った形で、恐らくお金を出している人達が、当時、私は『南京の真実』という映画を作りましたけども、この問題をやった頃、20本、アメリカ、カナダ、ドイツ、中国共産党は20本、こういったプロパガンダ映画を作っていた。お金を出していたってことです。日本では、私しか作れなかったんですよ。そのぐらい無関心、応援してくれた人は沢山、居ましたけども、本当に我々の国で4本でも5本でも作る人が居たらって言ったけど誰も居なかった。私しかいなかったです。今、2本、作ってまして3本目も記録フィルムを、今、繋いでいますけども、こういうような形のことがある。宇山さん、大丈夫かな」

スタッフ「ちょっと、回線が悪いようで」

水島「回線が悪い、じゃあ、こういうようなことがあって、また途中でね、繋がったらお話し戴こうと思います」

大高「せっかく…」

水島「うん。どうぞ、はい」

大高「Japan' s Holocaust…」

水島「はい、言って下さい」

大高「ついでにと言いますか（笑）」

水島「うん」

大高「社長が先程、アメリカは原爆投下について謝罪すべきだと。これ、死んでも謝罪しないですよ。それで、その為の世論づくりの一環が、この Japan' s Holocaust な訳ですよ。彼らの理論、これ、非常に解り易いんですけどね、つまり日本人は、まずアジア文明を憎むように国民に教えて、とする、じゃあ、アジア文明を憎むように教わったことがないんですけどね」

水島「うん、教わってないね」

大高「日本人が根深い自己嫌悪を生み出して統合失調症だったと。こういった背景があって、日本人が残虐行為を行って、笑いながら、その妊婦の腹を切り裂いて赤ん坊を刺して、みんな、笑いながらやっていたとか笑いながら集団強姦とか、やたらと日本軍が笑いながらって表現が多いんですよ。これも、何故、こうやってプロパガンダをやるのかって言うと、結局、ナチス・ドイツと日本は同格でないと、戦後賠償問題を含めて駄目な訳ですよ。この戦後維持したい人達の論理から言えば。

だから、こういった狂信的で、最も深いようで、排外主義的で国家主義的なサディスティックな日本人が人々だったと。こういった国だから完全に打ち負かす為には、優れた兵器と科学の進歩の組み合わせた連合国の総合力が必要だったのも不思議ではない。つまり原爆投下が必要だったという論理構築な訳ですよ」

水島「いや、だからね…」

大高「この著者はね、大事なこととして在米アメリカ人ですけれども、イスラエル国防軍にも従軍経験がある Bryan Mark Rigg という人は、ホロコースト・ミュージアムの中、理事もやっていてユダヤの方ですよ。でも、そのホロコーストとか I D F の経歴っていうのは確かアマゾンの経歴には出てこない。この本の経歴。隠しているのか分からないんですけどね。出せばいいのに。非常に私は不気味なものを感じているんですけども」

水島「そうですね」

大高「うん。先程もおっしゃる大東亜共栄圏の、まあ、それは何でも歴史は負の部分とプラスの部分もあるけれども、その本当のアジアの人々の独立と、みんな、黄色人種であっても、白人の支配から逃れて、きちんと自立していこうという、その当時の大東亜共栄圏に共鳴したアジアの人達は確かに居て、そこも全部、この本では歴史を書き換えて、楔、打ち込んでいる訳です。だから徹底的な日本封じ込めですよ。こういうことをやられているっていうのを知っておいた上で、やっていかないと中々難しい」

水島「まあ、それとね、集団的に、これは皆さんの言っておきたいのは、日本の中で、所謂、絶滅とかね、カルタゴの絶滅とか、こういうものは日本の民族の中に無いんですね。基本的には戦争はやります。しかし、大体、国譲りっていう形で古事記もそうですけど、国譲りというような形で、認めてくれれば、そちらの神様、出雲大社なんか特にそうなん

ですけどね、こういうような感じになっている。

例えば戦国時代ですら信長が異常だと言われてはいますが、でも他の所は、殆どそういう意味で言えば、全員絶滅、殺戮というのは殆ど無いんですね。秀吉や家康なんかにも典型的なように、降伏すれば、その城主が腹を切れればいいというようなこと。それから女性の何かを切り裂いて、どうだらこうだらとか笑いながらやるなんて言うのは、本当に日本の歴史に殆ど無い。だから間違っているのは何か、日本人が、侍が腹を切ると、切り裂くのを勝手にね。

中国の歴史の中には、こういうのが物凄くあるんですよ。ただ、我々の歴史の中には本当に、こういう文化的な問題として命とかそういうものの捉え方が違うから繋がっていると思っているから、みんな、そういうことを基本的にしないっていうね、信長の、所謂、一向宗とか、こういうね、政治化した宗教家に対しては、こういうのが一部、ありましたけどもね、これ、全員、虐殺っていうかね。ただ、本当に歴史の中で中々無いんでね、あのう…」

スタッフ「宇山さん、繋がりました」

水島「ああ、繋がった、はい。ということをしたと思いますけど、宇山さん」

宇山「はい。すみません。途中で切れました」

水島「今、一応、この二番目の文章を読んで、宇山さんを待ったんですけど、所謂、裕仁が神でないと主張する人は首を切られたなんて、とんでもないことが1940年にあったっていうのは本当の嘘なんだけどもねえ」

宇山「はい。うん。その中で、私は、こういうことが言えると思います」

水島「はい」

宇山「プーチン大統領やイスラム過激派、そして戦前の日本天皇というのが結局、一括りにされている訳ですね。つまり戦前の日本を非難、攻撃しながらロシアやハマスを非難攻撃するというのが歴史的使命であるというように、アメリカ人は捉えているんだろうなというように思います」

水島「そうですね」

宇山「これはアメリカ人のマニフェスト・デスティニーではないのかなというように思う訳です」

水島「ああ、なるほどね」

宇山「この日本の軍国主義とか、そういう狂信者を破壊したのと同じように、今、アメリカはプーチンの野心を壊さなければならないんだというように主張し、それが自由と民主主義を掲げる崇高な使命なんだというような言い方を、アメリカのグローバリストやアメリカのネオコンがしている訳です。こういうアメリカが日本の犯罪を撲滅したと同じように、今、またプーチンの犯罪を撲滅させねばならないというロジック。ところが日本脅威論の根強さというのが、こういう中に今更ながら続いているのかなというように思います」

水島「そうですね」

宇山「アメリカ人は結局、こういう形で日本を黙らせるということが前提になっているのではないかというように思いますし、彼らが仕掛けて来る歴史戦の狡猾な罠というものが、ここに表れているというように思うんですよ」

水島「そうですね」

宇山「ですから、このウクライナやイスラエルこそ正義と言って、アメリカと一緒に踊るという事が、どれ程、日本の国益に反するかということを公正な視点で、歴史に根差した巨視的な視点で、これを見ていかなければならないというように思うんです」

水島「はい」

宇山「一方的で偏狭な対米外交は、歴史観の欠如から来ていると言ってよいというように思っております」

水島「そうですね」

宇山「すみません、切れまして」

水島「おっしゃる通りだと思います。これも一例で言うとね、イラク戦争も、実際は、大量破壊兵器があるってことで攻め込みましたけども、それで何と200万人のイラク人を殺しているんですね。200万人ですよ。これはホロコーストとかね、そういう言葉でやるぐらい、200万人を殺しているっていうね。

つい、この間っていうか、まあ、10年、20年前ですけどもね、こういうことが起きている。今も起きている、ずう〜っと続いている、例えばベトナム戦争で言うと、私が大学生の頃ですけど、あのナパーム弾でね、映画でフランシス・コッポラの地獄の黙示録とか、こういう中にありますけど、あれは本当ですからね、ナパーム弾で、ジャングルごと全部、焼いちゃうっていうね。これが東京大空襲で行われたことだしね。ずう〜っということを聞かない奴は、みんな、こういう風に殲滅するというねえ、実際、こういうことが、ずう〜っとベトナム、中東、今、アフガンもそうだったろうし、続いているっていうことですね」

大高「このイラク戦争ね、このブライアン・マーク・リッグの下に書いてあるアンドリュー・ロバーツさんという方は、大量破壊兵器があるからイラクに攻め込めって言ったネオコンの元祖ですよ」

水島「ああ〜、そいつか」

大高「そう」

水島「なかったんだよね」

大高「『the price is worth it』って、あのオルブライト国務長官が価値のある事だなんて、あの200万人の虐殺をですよ」

水島「ねえ」

大高「だから、もう、いいようにやってきた連中ですよ」

水島「それと、産経に出ていましたけど、イスラエルの財務大臣がね、200万人のパレスチナ人を飢え死にさせることは道德的だと」

大高「うん」

水島「ただ、世界が許さないっていうね。そういうことを平気で言っちゃうっていうのって、凄いなあっていう感覚ですよ。折本さん、どうですか、今の話で」

折本「そうですね。正に、そういう全体主義対自由主義っていう非常に解り易い二項対立の構図にカテゴライズして、例えば、先程も出ていたように戦前の日本が、天皇を中心とした軍国ファシズムだという風にして、それが一方的に大陸を侵略したので、要は原爆を落として懲らしめるといふ勧善懲悪の歴史観に立っているという風に思うんですね。ただ、私からすると、侵略者はどちらなのかとう風に思う訳でありまして、先程、マニフェスト・デスティニーという言葉が出ましたけれども、正に日本、ああ、そもそも、じゃあ、何故、大東亜戦争が起こったのかと、昔、中村粲先生が『大東亜戦争への道』という本を出して…」

水島「ありますね」

折本「そういう名著がありますけれども、やはり、アメリカが南北戦争、何て言うんですか、その大陸横断鉄道が通って、それで南北戦争が終結して、フロンティアが西海岸に到達して、本来であるならば、別に太平洋に出て行く必要は全く無かった訳ですけども、しかし、そのマニフェスト・デスティニーという、はっきり言って、私は、もう白人の思い上がった宗教的な使命感だと思うんですね。

要は、アジア、或いは、アメリカでない世界に対して、それはアメリカ的な価値観を広めていくということが自分達の使命なんだということで、太平洋に乗り出して行った訳です。ただ、まあ、それは、あくまでも、そういう大義名分であって、やはり本音の部分では満州であるとか、こういうチャイナの経済利権というものが欲しかったと。ただ、まあ、その時に現れた邪魔者が日本だったということだと思うんですね。アメリカにとって、チャイナや満州っていうのは本来、関係のない場所だった訳ですけども、我が国にとって、やはり、満州という地は朝鮮を防衛する上に於いては地政学的に非常に重要な場所でありまして」

水島「そうなんですね」

折本「我々も別に好き好んで大陸に出ていった訳ではなくて、清朝が、この眠れる獅子から瀕死の老体国になってアヘン戦争に敗れていく一方で、その属国であった李氏朝鮮は本当に国家としては、もう崩壊状態にあるという中で、ロシアが南下政策を推し進めて、まあ、このまま行くとロシアの植民地にされてしまうと。朝鮮がロシアの植民地になれば、一衣帯水を隔てた日本の眼前では、ロシアの脅威に直面する訳ですから、この朝鮮の独立を守る為に日清・日露戦争を戦って血を流して戦った訳です。

この朝鮮を守る為には、やはり満州で影響力を持たなければいけない。だから、やむを得ざる国防上の地政学的な必要によって我々は大陸に出ていった訳ですけども、しかしアメリカは全く何の関係もないチャイナや満州の単に経済的な利権が欲しい。あとは思い上がった文明的な偏見ですね。マニフェスト・デスティニーに基づいてアジアに出て行った。

最終的にはアメリカの謀略によって、我々は追い詰められていって、大東亜戦争に至ったという、まあ、窮鼠猫を噛む戦いだっただという風に思います。中国、国民党にしても裏で資金援助をして糸を引いていたのはアメリカでありまして、結局、中国をけしにかけて、一生懸命、日本と戦争をさせようとしていた訳です。その国民党の中にもソ連の共産分子が入り込んで日本を挑発して、結局、日本は満州を守る為に華北へ出て行かざるを得なかった。泥沼の内心に引き摺り込まれて、最終的には仏印に進駐した段階で、石油の輸出を止められ、しかも対日金融資産を凍結されると。

これは、もう事実上の宣戦布告だと、私は思うんですね。正に、そこまでされて、最終的にはパール・ハーバーで嵌められて、我々が侵略者のような扱いを受けていますけども、長い歴史のスパンで近代史を見るのであるならば、私は真の侵略者はアメリカであると。我々は、そういう国家の主権を守る為にやむを得ざる対策を打っただけであって、侵略者はアメリカだということを明らかにする必要があるという風に思います。

その勸善懲悪の歴史観に立って、悪い事をしたんで原爆を落とされたんだと。ですから広島・長崎の人達が、ああやって殺戮されたのは、むしろ当然のことぐらいに、やはりアメリカ、特にエマニュエル大使は思っていると思います」

水島「そうですね」

折本「今回の長崎の式典にも、ロシアやベラルーシは招待されなかった訳ですけども、しかし2014年のノルマンディ上陸作戦の記念をする式典では、原爆投下の映像が流れた時に、あのオバマ大統領はガムを噛みながら拍手をした映像が流れました。しかし、その時にプーチンは十字を切って哀悼の意を表した訳であります」

水島「うん」

折本「そういう意味では、むしろ、ロシアも招待すべきだと思いますし、やはり、そういう歴史観であるとか、或いは近代史そのものを、この大東亜戦争が何故、起こったのかということ、もう一度、見つめ直す必要があるんじゃないかなという風に思います」

水島「そうですね。ウクライナ戦争も実際は2014年から、ヌーランドが反露政権をつくるクーデターとか色んなことを、マイダン革命とかいう形で、ずうっと工作していた訳で、やっぱり、そういうところは全然、日本の産経新聞から朝日新聞まで報道しないというねえ、こういう状態で、とにかく侵略した奴が悪いってというようなことになっている訳です。

この問題は戦争っていう問題を考えた時、よお〜く、しっかり見なきゃいけない。冒頭に、施さんが『戦争の語り方』っていうことをおっしゃいましたけど、本当に事実からいれないといけないっていう感じがします。用田さん、すみません。お待たせしました。この問題について纏めて載いて、そのあと後半で軍事情勢の問題についてお話載きたいと思います」

用田「はい」

水島「このエマニュエルさんの問題について何かコメントがありますか」

用田「この話を聞いた時に、先程から皆さん、お話をされている通り、エマニュエル大使が結局、そこに追悼っていうか、来なかった訳ですよ。だから、これだけを見ても、G

7の国というのは、日本人という為に共に戦う国民ではないってことですよ」

水島「うん」

用田「G7というのは、その時にエマニュエル大使、エマニュエルがやったこと、それからG7がそれに追随したこと、基本的に、今迄、長崎とか、それから広島とか、そういう所では参加してやったということですよ」

水島「うん」

用田「だから基本的に戦争で戦って、少なくとも原爆を落とした加害者として、参加させて戴きますという気持ちは全く無い訳ですよ」

水島「そうですね」

用田「だから、これが全部繋がるのが、今、これが、たった小さな話かもしれないけども、私は産経新聞をもうとっていないから産経新聞の話は分かりませんが、よく言われるディフェンス・プログラム・ガイダンス92年というやつで、国家戦略指針、この中に日本に対しては二度と普通の国にはしないという、その前の枕詞には『罪を背負った日本』と書いてあるんですよ。罪を背負った日本には二度と普通の国にはさせないと。だから、これが敵国条項に繋がるし、ずうっと欧米の精神の中にそれが流れていると」

水島「うん」

用田「まあ、皆さんがおっしゃった通り、結局、何か事があった時に、所謂、助けに来るとか来ないとか、そんな話ではなくて、基本的に日本が悪いんだという世界な訳ですね。今、NATOが拡大をしていっているという話をするんですが、NATOの拡大が太平洋まで及ぶっていう話を、とんでもない、とんでもない嘘っぱちの話を真に受けて、そうだとそうだとやっている人達も沢山居るんですが、気は確かかと言いたいんですよ。

その一つは、NATOは、欧州でもうボロボロになっている訳ですよ。破れ傘。破れ傘だし、それから首相が代わったり、或いは、EUの委員長とか、そういうのが代わった時には、必ず中国詣でをしている訳ですよ」

水島「そうですね」

用田「ヨーロッパはアジアの戦争に加担をしますか。フランスだけの話じゃなくて、いやいや、そんなことやるべきではないという話が60%、70%以上なので大半ですよ」

水島「うん」

用田「距離的にも離れているし、基本的に日本が何かあった時に、NATOが来るはずが無いんですよ」

水島「そうですね」

用田「それは何かと言うと、あとの話にもあるかもしれんけども、結局、グローバリストというものが、ずうっと生き延びて来ていて、グローバリストの軍事部門の統制をさせるのがNATOですよ。だからNATOはユーラシア大陸を囲む。囲むための軍事部門の主体がNATOであって、それが中東は今、ボコボコになっていますけども、ヨーロッパからアジアまで繋ごうという。手を繋いだのは、決して今回のエマニュエルの事と、別の話

ではなくて、基本的にそんなのは絵空事、幻なんだということに、日本人は目を覚ました方がいいという風に思います」

水島「はい、そうですね」

用田「先の大戦に於いては、やっぱり、その言い方は少しあれかもしれませんが、日本は、やっぱり終戦という言葉はやめた方がいいですよ」

水島「うん」

用田「敗戦ですよ」

水島「うん」

用田「先程、言われたこととは、少し違うかもしれませんが、やっぱり、そこには、日本にも足りないところがあった訳です。いいところもあった訳です。いいところは拡大すればいい。人種差別とかそういうやつの撤廃をして、そこで1945年以降、またアメリカとかイギリスとかフランスが来て植民地にしたんですよ」

水島「うん」

用田「だから、日本人は、そこに残って一緒に戦ったんですよ。こんなことを歴史で教えない。これだけ教えれば、日本人がいかにか正しい考え方を持っていたかということが判るはずですよ。それを教えないで植民地支配というやつに対して、曖昧な態度を執ってきた」

水島「うん」

用田「いずれにせよ、やっぱり負けたら負けたっていうことを強く強調するのは何かと言うと、負けない為にどうしたらいいかっていうことを考えなきゃいかんのですよ。それがなあなあ、まあまあで終戦だと言っておっただけでは、アメリカの保護下の中の日本という形は全く変わらないんですよ。だから、そういう意味では、我々は、一度、真剣に、それは戦略めいてはいいものを持っていたけども、結局、そこは横槍を入れられた。何故かと言うと、悪い面があったとすれば、共産主義者とグローバリスト、まあ、似たようなところもありますけども、これに横槍を入れて方向を変えさせられてしまったという反省が無ければ、今の反省には繋がらない訳です」

水島「そうですね」

用田「だから、我々としては、やっぱり日本人とすれば、しっかりと今、一つだけ言えば、負けない為にどうしたらいいか、っていうことを、アメリカ抜きに考えて、日本が出来る訳ですから。だからそこを考える為にはシビアによく考えて、先程、水島さんもおっしゃっていた通り、そのまま第二次大戦に入って来る、所謂、先の大戦に大東亜戦争に入って来る前の日本はそのままでもいいのかと言うと、やはり、そうではない訳ですよ。

やはり、それは善悪の判断とか、もっと、しっかりした心の持ち方が出来る為には、所謂、聖徳太子の時代からあった仏教と神道と、まあ、儒教も含めれば、こういうものがちゃんと、コンビネーション良く、日本にあったというのを、仏教を外して善悪を捨ててしまったところにも大きな問題がある訳です」

水島「うん」

用田「私は、そう思っています」

水島「その通りです」

用田「だから、そこは反省すべきところは、しっかりしないと、また、このエマニュエルとかこういう人みたいに、日本人は先祖返りをしたいんだという風に思われているんだったら、結局、また同じ轍を踏んでしまうということになると思うんですね」

水島「はい」

用田「もう一つは、今のお話をずっとお伺いしていて、宇山さんのそういう本の翻訳を見せて貰って愕然とするのは、あのウクライナ戦争は終わらないんだと（苦笑）。これは最終的に彼らがやるのは、もう本当は戦争が終わっているんだけども、残り火に油を注ぐという事を今、やっている訳ですよ。

それはアフガン化するっていうことを最初から言っていましたけど、北朝鮮化する、アフガン化する。ずうっと火種を残している。核戦争の危機を残しておくということをする訳でしょうが、それを、きれいな言葉で取り繕って、先程からありますように謝罪もしなければ、反省もしないと」

水島「うん」

用田「ここは、恐らく、あとから話になりますけども、ブリックスとかグローバルサウスなんかの台頭で世界が二分化、二分化というより、もうG7の方が少数派になっておる訳です」

水島「うん」

用田「その事実が解っていない。それから軍事力としても、これは、あとから時間があれば話しますけども、限界に来ている訳ですよ」

水島「うん」

用田「三正面の同時の戦争なんか出来っこないのに、今、三正面の戦争に取り込まれているんですよ。それはイギリスとアメリカだけの意志ではないと、私は思っています。やはり、それは、グローバリストの中核に居る者が未だ右往左往していると思いますけれども、そこが、もっと大きな悪い次世代をつくらうとしているんだと思う。

最後に一つだけ言いますと、やっぱりオリンピックでも何でもルールを変えるじゃないですか、何か直ぐ（失笑）、自分達が勝つ為に欧米主体にして、腹立たしいんだけども、このプーチンの言っている事は全くその通りだと思うのは、7月11日にブリックスの議会フォーラムで『彼らのルールでもって一定の秩序を定めようとしている、このようなルールは、自身を特別であると考え、他人に自分の意志を支持する権利を傲慢に主張する人々の利益の為に、その状況毎に、その都度、新たに書かれたり修正されたりしています。正に古典的な植民地主義の伝統そのものです』とプーチンが言っている訳ですよ。

それはプーチンが反グローバリストとして、しっかり、その欠点を見抜いているけども、何のことは無い、第二次大戦、日本は戦って植民地っていうやつを一応、ぶっ壊したんだ

けども、植民地主義は今の欧米だとかグローバリストの中に脈々として残っていて、その思想は、日本はそれに加担をしていると。最初に申し上げた通り、加担している日本なんか誰も見たくない訳ですよ。だから尊敬は無い。中東からもそれからグローバルサウスからも、中国を除くブリックスの中からもインドとかを含めて、こういう所からも、もう信頼を取り戻すのは非常に難しい状況まで来ていると。

だから信頼を取り戻す為には、もう一度、もう一度、今、戦ったアメリカとの間の、だから、戦争しろとは言いませんが、アメリカからの自立、独立、これをやっていくってことが必要になって来る。結局、そこに結びつかなければ、」

水島「はい」

用田「我々は先の大戦では負けた、負けたことに対する本当の教訓を汲んでないし、戦争で沢山、亡くなられた人達の魂に、英霊にも応えてはいないんだという、将来に向かっての厳しい認識は必要だと、私はそう思います」

水島「はい。全くその通りだと思いますけどね、だから8月15日、丁度、我々は、毎年、昇殿参拝と日の丸行進をやります。丁度、その特攻隊の映像も入れた2分ぐらいのフィラーがありますので、ちょっと観て載ってから休憩に入りたいと思います。

具体的に言うと、本当に、今、用田さんが言ったように、我々は本当に、さっき言った様に、本当に血と汗と涙、これが必要だと、血が必要だということです。命懸けでみんなが戦わない限り、取り戻すことは出来ないだろうと。ただ、先人達は、それを、色んなねえ、あのう、小林よしのりさんが究極の痩せ我慢と言いましたけど、そんなもんじゃないです。そんな、みっともない感じでね、そういう人も居たろうけども、殆どの人は、それが自分の運命ということで国と運命と自分の命を重ね合わせた。そういうものですので、フィラーをご覧戴いて、一回、スタジオに戻りますそうです。では、ご覧下さい、はい」

<VTR開始>

文字—ますらをの かなしき命 積み重ね 積み重ねまもる 大和島根を 三井甲之

文字—八月十五日

文字—英霊に感謝し靖國神社を敬う 日の丸国民行進

文字—靖國神社

ナレーション「田形さんは数々の輝かしい戦果を挙げた陸軍の名パイロットである」

文字一元陸軍准尉 特攻乗員教官 田形竹尾

ナレーション「また特攻隊の教官として若い隊員達を鍛え送り出し、」

文字－田形竹尾陸軍曹長時代（昭和十三年）

ナレーション「自らも終戦前日、特攻命令を受けた経験がある」

文字－田形竹尾陸軍曹長時代（昭和十三年）

田形「人間は自分の為にも覚悟を決めれば死ぬると思いますが、公の為、国家の為にという、ひとつ使命感とか誇りを持てば勇敢に死んでいけるということは、戦争の体験から、私達も分かっていますが、殆どの戦友が大空で散っていく時は、必ず戦友に翼を振って、お別れして逝っています。それは、ただ翼を振って別れたんじゃないでなくて、あとを頼むという言葉でない大きな意味が含まれているっていうことを、生き残った私達一人一人が感じて、戦後、生きて参りました。

もう死の直前ですから、火災を起こして火達磨になって落ちていく時は、或いは、敵弾を受けて墜落していく、或いは、突入していく、そういう最後の瞬間ですから、しかし、やはり、意識は、はっきりしていると思いますので翼を振って別れて逝った。

それは今も、五十数年、経っても、私の脳裏から消え去らない。心、魂にしっかり焼き付いていますから、それが消えない限り、やはり、その人達の『あとを頼む』という意志に答えていく、それが生き残った戦友の私達の使命であると、今日まで考えて生きてきました」

文字－英霊に捧ぐ

文字－鎮魂と沈黙の国民行進

文字とナレーション－

戦友別杯の歌

言ふなかれ 君よ わかれを
言ふなかれ 君よ わかれを
世の常を また生き死にを
海ばらの はるけき果てに
今や はた何をか言はむ
熱き血を 捧ぐる者の
大いなる胸を叩けよ
満月を 杯にくだきて
暫し ただ酔ひて夢せよ
わが征くはバタビアの街
君はよくバンドンを突け
此の夕べ 相離るとも
かがやかし 南十字星を
いつの夜か 又共に見ん
言うなかれ 君よ わかれを
見よ 空と水 映ゆるところ
黙々と 雲は行き 雲はゆけるを
大木惇夫詩集

文字一八月十五日 靖國神社へ

文字一八月十五日 英霊に感謝し、靖國神社を敬う国民行進

令和6年8月15日(木)

15時30分 錦華公園 集合*お手伝い戴ける方は14時30分にご参集ください。

千代田区猿樂町1-1-2 JR御茶の水駅 御茶の水橋口

または神保町駅A5出口より徒歩5分

16時00分 錦華公園 出発 ~俎板(まないた)橋児童遊園

千代田区九段北1-1-1-「九段下」駅下車徒歩3分

文字一八月十五日 英霊に感謝し、靖國神社を敬う国民行進

令和6年8月15日（木）

8月15日は、「戦没者を追悼し平和を祈念する日」です。

私たちは、日の丸を掲げ、英霊に感謝と尊崇の念を捧げ

粛々と行進します。

主催 頑張れ日本！全国行動委員会

チャンネル桜二千人委員会有志の会

連絡先 頑張れ日本！全国行動委員会

TEL 03-5468-9222

<http://www.ganbare-nippon.net/>

文字一八月十五日 英霊に感謝し、靖國神社を敬う国民行進

令和6年8月15日（木）

この日の丸国民大行進は、すべての国民が

日の丸を掲げ、英霊に感謝し、尊崇の念を捧げる

「沈黙の行進」です。

主催 頑張れ日本！全国行動委員会

チャンネル桜二千人委員会有志の会

連絡先 頑張れ日本！全国行動委員会

TEL 03-5468-9222

<http://www.ganbare-nippon.net/>

文字一八月十五日 英霊に感謝し、靖國神社を敬う国民行進

令和6年8月15日（木）

後続く私たちを信じ、祖国日本と国民の為に尊い

御命を捧げられた英霊の皆様、その祈りにお答えする

行進です。

主催 頑張れ日本！全国行動委員会

チャンネル桜二千人委員会有志の会

連絡先 頑張れ日本！全国行動委員会

TEL 03-5468-9222

<http://www.ganbare-nippon.net/>

文字一八月十五日

全国の草莽は

靖國神社へ

<VTR終了>

水島「はい。フィラーを観て貰いました。ご参加戴ければと思います。暑い中ではありますけど、30～40分のところでございます。沈黙して『海ゆかば』の音楽が流れていきますけど、錦華公園から靖國神社まで静かに行進していきます。宜しくお願いします。それと同時に、いつも言うんですけど、靖國神社は、お願いする場所ではありません。平和を祈るってことはあるとしても、基本的には靖國神社の英霊の皆様に感謝と尊崇の念、そして、英霊の皆さんが祈り、望まれていたこと、これを、あとに続くものとして引き受けますと、お誓いするのが8月15日という日でもございます。

参加できない方も、ご自宅で、戦没者追悼式というのも政府は行いますけれども、この日は、真面目に我々の国の来し方行く末を考えて戴ければと思います。後半は、これからの日本、それは今、具体的に起きている軍事の問題とかを皆さんと共に話し合ってみたいと思います。一回、お休みします」

一同「(礼)」

<後半>

水島「後半になりました。後半は、少し軍事的な、現実的な世界、アメリカの報道ですけ

れども、イスラエルに対するイランの、或いは、ハマス、ヒズボラ、こういうところの報復というか戦いが間も無く始まるという報道もされています。先程、用田さんがおっしゃったように、アメリカはウクライナをやって、イスラエルのことをやって、それから東アジアも、実は、また、あの米韓訓練やるっていう、どっちかって言うと、北朝鮮が防御壁を造ったり、地雷を敷設したりしている。北の南進ではなくて北進っていうね、まあ、台湾よりも、むしろ日本と朝鮮半島の方が、その危険性が高いんじゃないかというようなことまで言われていますけれども、何故、三正面作戦とか、戦争をやりたがっているのは解るんだけど、ここまでやれる実力も今、アメリカ自体、持ってないんじゃないかというようなことをやりながら、それでも未だ、こういう混乱を起こし続けたがっている理由は何だろう、決して自由と民主主義の為ではないということは、もうハッキリしちゃったんですけども、用田さん」

用田「はい」

水島「はい、お待たせしました。軍事の問題ですけども、先程、一体、何故、こんな、無理無体な戦争を続けようとしているのか、よく解らんところもあるんですよ、私から言うとな」

用田「基本、そこが大変な肝だと思います」

水島「はい」

用田「大きな問題を解決する上で、何故、三正面をとっているのと。社長、申し訳ないですけどもパワーポイントを出して戴ければ有り難いんですが」

水島「今、出しました」

用田「はい。正に今、言われたところの質問そのもので『何故、英米は力の限界を超えて、世界3正面戦争の恐怖を煽るのか』と」

水島「うん」

用田「この恐怖を煽るのかと書いていますけども、先程、申し上げたようにイギリスとアメリカの力の限界は完全に超えているんですよ。それは大きく二つあって、一つは、英米の、所謂、国というものを単位とした一極支配は地球規模で崩れ始めている」

水島「うん」

用田「だから、これは一極支配を脱却と言うよりも自壊、壊れ始めていると。逆に言うと、壊すのを容認している人達が居るということですね」

水島「うん。そうですね」

用田「二つ目は、しかし、それに続く新世界秩序、これは二つありますね。グローバリズムのいうところの『New World Order』は地獄だと申し上げました。奴隷制度です。もう一つはプーチンが目指している、自分がウクライナで戦っているのは新世界秩序の為だと言っているんですよ」

水島「うんうん」

用田「これは多極化した国家主権を持った国の集まり、この二つは全然、違うんですよ」

ね」

水島「うん」。

用田「だから基本的に大きなせめぎ合い、ぶつかり合いが出て来るだろうという風に思っています」

水島「うん」

用田「それで、その次ですけども、この画を見て戴けると、よくお解りかと思いますが、先程申し上げた冷戦後、1992年辺りは正に3正面でも戦える能力を持っていたんですね」

水島「うん」

用田「ソ連、ロシアも基本的に力が弱かったですから」

水島「うん」

用田「9.11では中東と、あとプラス1。本当は0.5ですけども、所謂、力の加減が落ちて来た、力が落ちて来たので、それしか出来ませんっていうことだったんですね」

水島「うん」

用田「トランプに於いては、もっと、はっきり判って対中共なんですね。だから、基本的に1正面なんです。これが基本的に正解な訳ですね」

水島「そうですね」

用田「ところがバイデンになったら、一体どうしたのと言ったら、ロシアが敵になって脅威になって正にウクライナで戦争をおっぱじめた訳ですね」

水島「うん」

用田「一方で2正面で戦いますということは言っておったんですけども、実際に欧州とアジアに軍隊を置きますということを言っているけども、中国とは競争と共存ということで全く戦うという意味じゃないんですよ」

水島「うん」

用田「でも嘘の2正面作戦でも2正面作戦だったんです。ところが一番下に書いてあるように、バイデンが去年の10月7日にハマスが攻め込んで来たという形になりまして、そういう形を執らされて3正面になったんです。おかしいですよ」

水島「うん」

用田「トランプの時の1正面しか力がないやつが、2正面とか言って今度は3正面」

水島「うん」

用田「中東、イランというやつは、実は、このバイデンの2正面作戦、国家安全保障戦略の中には中東という項目がないんですよ」

水島「ああ」

用田「これが、いきなり出て来るんですよ。だから、これは考え方として二つあって、ウクライナで失敗したから、中東で何処か火がつかないかと。一番、発火点のある所、何処と見た時に中東だという風にやった可能性はありますし、それを見ていて、それを引き摺り込んで来て、ここで始めようというイランまで巻き込んでやろうという、だから、皆さん、戦争屋さんも一枚岩じゃないですよ」

水島「うん」

用田「だから、そういう流れの中で、基本的に3正面やりますが、もう完全に力の限界を超えているということになります。だから、先程も申し上げたように、ウクライナは失敗をして火に油を注ぎ続けて、アフガン化、アフガン化って言うか北朝鮮化をすると。核戦争の脅威というのをちらちらさせると。

先程からお話があった通り、反省をしない欧米はやめませんから。基本的に、私は悪うございましたって言わないという、これが大変な問題だと思います。そこを、どう落とし前つけるかっていう話と、クルスクにウクライナ軍が侵攻していますけど、全く意味がありません。何故かと言うと、ロシアは領土を交換しようなんて思っていませんから。自分の領土は自分の領土」

水島「うん」

用田「それよりもNATOを拡大して中共のように、どんどん膨張して来るNATO、欧米が怖い訳ですよ。だから、それはやめろと言っている訳ですよ。だからNATOの拡大をやめるっていうことは欧州、そしてアメリカ、イギリスの完全に顔を潰すことになりますよね。その一步が中々踏み出せないけども、じゃあ、落とし前はアフガン化とか、所謂、そういうことにしてしまうんだらうなということになるんだらうと思います。

でも現実の力を見ると、両刃の刃けどもアジアへの戦争の危機を扇動して、私は煽っていると見えています」

水島「うん」

用田「トランプも基本的には煽りが激しいと、煽っているだけだということを言っています」

水島「うん」

用田「意外と台湾だとか朝鮮半島に対しては冷たい見方、冷酷ではありませんが、冷徹な見方をしています」

水島「うん」

用田「ミアシャイマーもそうですね。そういう風に言っています」

水島「うん」

用田「台湾なんかで戦争は基本的にありませんという話をしている訳ですよ。あとで話をしますが、だから形上は中東1正面戦争の重視で転換していると」

水島「うん」

用田「中東は今、お話があったようにアメリカも停戦をした方がいい、イスラエルも停戦をした方がいいというグループと、イランまで引き込んだ戦争をしよう、ヒズボラから進んで行こうという話と、所謂、戦争屋の考え方も全然、合致していませんけれども、だけでも、その二つに割れながらも引き摺り込んで来ようと。ただ、この前から話がありますように、イランは、そう簡単に引き込まれないですよ」

水島「うん」

用田「何故かと言うと二つあって、一つはブリックスと、それからイスラム協力機構57か国がサウジに集まって話をしましたけども、これが後ろ手に居て一匹狼でない。北朝鮮も一緒です。一匹狼でなくて、イランが言っている事は面白いですねえ。報復は、停戦の可能性を妨げない形とタイミングが望ましいと。時期、方法を考えると。

優先はガザの停戦確立だと。永続的な停戦を確立することが目的なんだと。こういうことをイランは言っている訳ですよ」

水島「うん」

用田「まあ、何かやるかもしれませんが。でもイランまで引き摺り込もうというのは右か左かどちらか言えと言われれば、私は、イランは引き込まれないし、引き込むとこまでやらないし、だから、そこは何とかかんとか止まってしまう可能性はある。でも中東の一番目にアメリカは全力で少なくともヒズボラを潰すところまでは、アメリカと一緒に力を合わせてやる可能性がある。だから、結局、落とし所は見えない部分もありますが、ガザと西岸を平定してしまうと。イスラエルの領土にしてしまうと」

水島「うん」

用田「酷い話ですけどね、民族浄化ですよ」

水島「うん」

用田「そこから基本的に、もしかしたら出来る可能性がある範囲はそこまでかなというところで暫くは続く。でもハマスを殲滅するのに10か月もかかっているんですよ」

水島「うん」

用田「こんな戦はですねえ。で、イスラエルだって青息吐息だと思います。アメリカも先程、申し上げたように3正面に展開をして戦える能力はありませんから、だからウクライナからも引き揚げ、そして中東に全力展開をするというところで、基本的に限界がくると」

水島「うん」

用田「だから、もう一度言いますけども、アメリカとかイギリスはどうなってもいいという世界がある訳ですね。それはあとで話をします」

水島「うん」

用田「もう一つ次のフリップをお願いします」

水島「はい」

用田「その次は青地の所だけ見て貰えばいいんですけども、こんなことをやっている最中にプーチンはユーラシア大陸を囲むというのが、アメリカの戦略だったですね。欧州、中東、アジアと。これを見て下さい。北朝鮮、イラン、ベラルーシ、ユーラシア大陸に3つの拠点を創ったんですよ」

水島「うん」

用田「攻め込まれないように。そして更にインドとか中東の国だとか、こういうのが色々な意味で補強をするということになって、アメリカはドタバタやっている間にプーチンは強かに3正面作戦の壁を造ってしまったということで、基本的に、私は、プーチンの勝ちだし、時間が経てばトランプが味方をするし、欧州も崩れていくしプーチンの味方が増えて来ると。

ブリックスだとかグローバルサウスは、もう基本的にプーチンの仲間ということになっているということで、ほぼ勝負がついてきたなということが言えると思います」

水島「はい」

用田「次は世界激動の震源というのは今、見たようにイギリスとかアメリカとか、もう国による一極支配、所謂、英米というものは、ある程度、グローバリストの中核に居る部分は、大体、そこは世界の3正面で火を点けて、発火点をつくって火に油を注いで、恐怖と不安を煽ればいいという体制で、ある程度、落とし前を付けて来るとなると、今、やろうとしているのは、世界規模の新支配層ですね。

グローバリストの超一極支配へ乗り替わろうとする脱皮する激震というのが走っていて、何を言いたいかと言うと、この新世界秩序というのは決して良い方向に向かっているのではなくて、もう一回、脱皮をして、グローバリズムが、もう一度、脱皮をして、世界を収奪をしてしまうよという体制を創るってことです。その答、その形は見えてますね」

水島「はい」

用田「ちょっと小さいんですけど、申し訳ありませんけども、ちょっと前だと世界政府なんて言っていると、お前、おかしいんじゃないかという風に言われたかもしれないけども、しかし国を壊して世界政府の基盤っていうものは、脱皮して増殖して拡大していると。先程から申し上げたように国家主権を奪ってしまうと」

水島「うん」

用田「選挙で選ばれない者達が支配する超一極支配というもの、グローバリストのニューワールドオーダーですね」

水島「うん」

用田「その手先が全部、国を超えた組織ですね。WEFからの世界経済フォーラム、国連、EU、WTO、WHO、そして軍産複合体、NATO、超企業、超大企業だとか中央銀行と」

水島「うん」

用田「でも国とは関係ないけども、もう勝手に増殖して動き始めていますよね」

水島「うん」

用田「先程、申し上げたようにNATOは、何故、アジアに手を出すのと。不思議じゃないですか」

水島「うん」

用田「だから、これはグローバリストの軍事部門の一角だから、ユーラシアを囲む為の体制を創ろうとしたけども、残念ながら先程、お見せした通り、これは崩されてしまいました」

水島「うん」

用田「ところが産軍複合体は今、日本は呑み込まれてしまっています、いまだに」

水島「うん」

用田「お薬の問題だとか色々な脱炭素とか、そういうやつは、全部、国を超えた流れの中でやっている訳ですね」

水島「うん。まあ、そう言えばそうですね」

用田「それは、この前、水島社長に面白いやつを見せて戴いたんですが、ドウギンですか」

水島「はい」

用田「ロシアの。グローバリスト達は、アメリカなど、どうでもいい。だから、国なんか、どうでもいいんです。3正面、戦って疲弊しようが何しようが、元々大西洋評議会なんかは、アメリカの権限の力を削ぐという言葉で書いてある、そう言っているんです」

水島「うん」

用田「これ全部グローバリストの話ですけども」

水島「うん」

用田「アメリカなど、どうなってもいいと。彼らに必要なものは世界規模の力、超国家主権の絶対的な力」

水島「うん」

用田「そして欧米を含む全ての国は、世界政府を創る為の道具に過ぎないと」

水島「うん」

用田「トランプはアメリカの為に世界政府に反対していると。プーチン、習近平は違うと思うんですが、モディ、オルバン、フィツォ、ルペン、AFD等、多極化した世界は国家主権を持つシステムだ。国家主権を」

水島「うん」

用田「ここで大きく分かれて来る。日本なんかはバラバラにされているから、国家主権も無いような国は、もうグローバリストの餌として食べられてしまう。もう一つは外交問題評議会で主権は最早、正義ではないと」

水島「うん」

用田「国民国家は大企業、非政府組織、世界経済フォーラム、WHO、WTO、NATO等の国際機関へ主権を譲渡すべきだと」

水島「うん」

用田「これは2023年に言っている予言みたいなものですが、しかし、それは宣言をしているんですね。そういう国を創るぞというのが、今、お見せしている脱皮している世界で、必ずしも我々が望むようなバラ色の新しい新世界秩序ということには中々行かないかもしれない。最後ですけれども、今、真っ黒な部分が多い部分と黄色の光り輝く部分が多い部分と、世界はどちらかと言うとグローバリズム、グローバリストの方が多い、強いと私は思います。

だから一挙に転覆するとか楽観した考え方は全く持っていません。このケース1というのは、正にニューワールドオーダー、グローバリストがやる超1極の支配。所謂、沢山の従順に働く世界市民と。日本なんか、そうならされつつありますよね。そういう流れを創ろうという世界が真っ黒な世界だと思っています」

水島「うん」

用田「ケース2の方は、群雄割拠になりますけども多極な世界、これはプーチンが狙っております多極の世界であって、それは、でも国家主権の持った国の集りだと」

水島「うん」

用田「これは下手すると戦国時代になる可能性はあるという危険を持っていると。この真ん中の形から上に行ったり下に行ったりするんだらうなということで、私は、むしろグローバリズムという流れは脱皮をしながら巨大になって来つつあるから、これを止める為には相当な力が要るし、覚悟が要るという風に思っています」

水島「うん」

用田「そのフリップは、結構ですけども、今、私は、トランプの出現と日本が自分で自立をするということがアメリカから自立をするということです。これが世界を変えると。もう、これしかない。だからトランプは、このまま大統領になるかどうか判りません。エマニュエルが11月、辞めると言っても、我々は安心は出来ません、この8、9、10、11という四か月の間に最後の仕上げをやるはずですよ」

水島「うん」

用田「大変、日本は、もう一番、グローバリストにやられている国を見せて下さいと言ったら、日本を見た方がいいですよ」

水島「そうですね」

用田「日本は正に従順な世界市民の中に溶け込んでしまって、それを推進しているという

か、それはトランプも止めることは出来ません。私はトランプが大統領になったとしても、世界の方向は大きく変わるけども、トランプは相当、国内で力を削がれるんだろうという風に思います」

水島「うん」

用田「グローバリストの日本っていうのはトランプの敵なんですよね。ここは、はっきりさせておかなきゃいかんのは、バイデン・ハリス政権というのは同盟の強化ではないのに、産経新聞とかは同盟の強化ということで喜んでる訳ですよ」

水島「ね」

用田「これは、絶対そういうことではありません。代理戦争の輪を広げて、戦争ビジネスで儲け、指揮権を取りあげて決戦をさせずに長期戦をさせたいということで、危機に於いて同盟国を裏切るんです。きっとウクライナも裏切られます」

水島「うん」

用田「だから台湾もそうです。きっと、そういうことになります。そうなると思います」

水島「うん」

用田「トランプ政権は何かと言うと、これは日本に対するメッセージだと私は思っていますけれども、彼の公約の中には、強く主権を持った独立国を助けると。私は、それは対等の同盟を結び強い和を創りたいと。危機に際して助けるかどうかは分からないと。同盟国次第ということをお頭に置いておかなきゃいかん。

その為には外交・防衛の対米自立と、それから国家主権というのは外交・防衛の対米自立っていうやつですから、国防軍を持つなり、或いは、ロシアとの関係を修復したりするのは、外交・防衛の対米自立。核を持つ自主防衛。国防軍を持つということ。その上で新たな日米同盟を構築するということになるだろうと思います」

水島「うん」

用田「最後に一つ言わせて戴くと、今の日米同盟はどうなるかっていうことを言わせて戴くと、4つあって、一つは世界に3正面の戦争を強要して、主敵である、中国を見間違えるような日米同盟は、日本の国益には合致しない。だから日米同盟としては役に立たない訳です」

水島「う～ん」

用田「日本周辺に中国、ロシア、北朝鮮という3正面作戦を持ち込む日米同盟は、日本を滅ぼすから、そんな日米同盟ならやめた方がいいと」

水島「うん」

用田「三番目は、ロシアとの戦争には大義はありません。ウクライナの代理戦争をやめないで、戦争継続に加担する日米同盟は世界から孤立する。中東とかブリックスだとかグローバルサウスの国から、日本は絶望視されているというふうに思うんですが、実際の面に於いて軍事的な火遊びをしていると大変、危ないことになる」と

水島「うん」

用田「大義なきNATOは貧乏神だと。これは貧乏神。NATOは何も出来ませんから」

水島「うん」

用田「それから4つ目は、日本を抑えるだけの為の瓶の蓋（DPG92）は要らないと」

水島「うん…」

用田「そういう日米同盟はやめた方がいい。そんなもの、やめた方がいいです。占領継続の日米地位協定というのは破棄すべきだと」

水島「うん」

用田「これは、もう、そうしなきゃ独立国になれない訳ですよ。私は今迄、左翼の人達が、アメリカとの地位協定、沖縄なんかで、それを事ある度に賛意を得ました。これは左翼も右翼も無いと。所謂、地位協定と言うのは、日本人を侵害していると。先程、話に出ました長崎のエマニュエルの件を見てもお解りの通り、日本人というものを排除する。日本人を人間として認めていない訳ですよ」

水島「うん」

用田「それに対して加担する日本というのは、全く意義がない訳で、そういう意味からすると、日本はトランプの様に強く主権を持った独立国になるというように、アメリカから、まず一回、対米自立をするということに踏み込まないといけないし、日本がそういう体制を見せると世界は変わりますよ。私は変わると思う。この為の理念というやつは勿論、あります。先程、申し上げたように、先の大戦の前に戻れば良いということではない。それから進まないとならない。反省すべきはして、本当に強い日本、善悪を知った日本というものに戻る必要があるというものは当然、ありますけど、軍事的に見ると、ああ、今、出して戴きましたが、歴史に生き残って輝きたければ、日本の外交・防衛の対米自立、これは国家主権。

生殺与奪の権を日本が持つということですね。核を含む自主防衛というのは国防軍が持つと。それから新たな日米同盟を結ぶということですね。だから申し訳ありませんけど、今、大半の人が賛成をしている、憲法に自衛隊を位置付けるというのは国家主権の放棄です」

水島「はい、そうです」

用田「それが基本的に、今迄、十何年、二十年近く、それをやってきて出来ないってことは、エマニュエルの目論見は、ここで作らせてしまえば、憲法の中に自衛隊は永続的に存続する」

水島「うん」

用田「だから、あとは指揮権だけ、うやむやにして取れば良い。日本人はうやむや好きだからと、こういう世界ですね。だから指揮権を取ったら何が起こるか。それは決戦の場で決戦をさせられない。直ぐさせないと」

水島「うん」

用田「長期戦に持ち込ませられて、日本は疲弊して終わると。こういうことになります」

水島「はい」

用田「長くなりましたが、そういう風に、私は見立てております。以上です」

水島「一応、これも言うておいて下さい」

用田「あ、そうですか。ここは水島さんにも強調して戴きたいんですが、三段構えの日本の防衛っていうのは、日本は独自で出来るんですよ」

水島「はい」

用田「何故かと言うと、三段目の潜水艦に戦略核兵器を持って、そして沈めておくというのは最終段階ですね。3段階目。これは相当な抵抗を受けますよ」

水島「うん」

用田「でも、それは効果があるでしょうと」

水島「うん」

用田「ひとつ前に戻って2段階目というのは戦術核、これは伊藤貴さんが言われますね。戦術核というのは効果があると。中国だとか北朝鮮とかロシアが使うぞと言ったら、これだけ、効果があるんだっていうので造っていますと。一番下を書いてあるように、北朝鮮は早速、新型の戦術核ミサイル1000発、250両、4発を積めるやつを1000発、急速に配備をしましたと」

水島「はい」

用田「じゃあ、戦術核の威力が解った訳です。もう一つ、日本の戦術核は、熱を出す核というものを、やっぱり日本人とすれば出来るだけ使いたくないっていう気持ちがあるというのは充分、解ります。だから、それを空中で爆発させれば電磁波が出て、中国の通信システムを全て破壊するんですよ。だから、アメリカは、これをサイバー攻撃のカテゴリーに入れてあります。この戦術核によるEMP攻撃っていうやつですね」

水島「これは凄く大事な話でね」

用田「はい」

水島「用田さん、まあ、私は解っているつもりだけど、もう一回、言うておいてくれますか。つまり上空で核爆発を起こして、電磁波の中でサイバー攻撃になるということですね」

用田「はい、そうです」

水島「色んなコンピュータ施設でも破壊するっていうことですね」

用田「そうです。電磁波が出て、衛星通信システムを全部、破壊するんです」

水島「はい」

用田「破壊っていうことになります。だから、そこは3発か4発あれば、中国の正面であ

ると、基本的に中国はミサイルが全く撃てないという状況になるんです」

水島「うん。ということですね」

用田「だから戦術核というやつは、我々が国産として唯一残ったのは、対艦ミサイルですから」

水島「はい」

用田「陸海空が持つ訳です。千キロ、飛ぶんです」

水島「はい」

用田「この頭に付けると中国まで飛んで行って、それがパンッと破裂すれば戦術核としても使えますし、所謂、電磁波攻撃の主体。電磁波攻撃でやると、基本的に日本人のマイナーなイメージも少しは解けるんじゃないかと、そこを私は大変に心配する部分はあるんですけども、そこまで封印をされてしまうと、日本は全く勝つことが出来ません」

水島「そうですね」

用田「船を沈めると、第一段階で敵艦の船を沈めろというのは、千キロ飛ぶ対艦ミサイルで沈めるんですけども、先程、言った電磁波だとか、それからウクライナで使っている無人機だとかAIですね。この世界」

水島「はい」

用田「この無人機というやつは相当、戦いの中核になって来ますよ。だから中国は今、直ぐ台湾に攻め込むことはない、私は思っています。それは、中国経済がボロボロだという以外に、彼らは今、ウクライナ戦争を見て、中国人は中国人を一番、信用していないと思います。これは戦えない。あれだけ汚職をして戦える軍隊ではないという風に見ています。

少なくとも2～3年は、この無人機だとかAIとか、そういうものに、どんどん取り替えていくんだと思うんですね。だから、そういう戦い方が変わっていくのに、上陸作戦がどうしたということだけを見ていると、そこは我々がウクライナの教訓を全く受け取っていないことになりですね」

水島「はい」

用田「だから、第一段階は、こういう今、出来る分野を延長させて作っていく。電磁波なんか、日本が凄いですよ。でも残念ながら、こういう技術は、アメリカとDARPA (Defense Advanced Research Projects Agency) といった研究開発組織をハイリスクとハイリターンしかやらないという、これ、私はどんどん日本に入れるべきだと言ったのは、出来るのは嬉しいんですが、実は、その傍にマサチューセッツ工科大学みたいなのが来て、民間と一緒に、その技術を全部、取って、だから装備も技術も産軍複合体も全部、アメリカに取られていくというのが、今、エマニュエルがやった功績です」

水島「うん。そうですね」

用田「我々は強い心を持たないと、外国に技術を与えては駄目ですね」

水島「その通りですね」

用田「もう一回言いますと、第二段目。水島社長にも常日頃、これを強調して戴きたいと思うんですが」

水島「はい」

用田「第3段目のSSBN、これも勿論、必要ですが、そこに至るまでの道は非常に茨の道があるけども、第2段階までは日本の独力で出来る部分がある。これをやれば、日本は自力で守れると思います。だから自力で守れると思っていないから、アメリカに頼るんですが、私は戦後の大きな反省になるだろうという風に思っています」

水島「はい。どうも有難うございます」

用田「長くなってすみません」

水島「いや、大変、具体的で参考になりました。やっぱり、この今の分析の中で、皆さんの意見も聞きたいのは、こういうことですね。もう一つは、皆さん、聞いてびっくりしたと思うんですけど、実際にはアメリカがどうなってもいいと思っているという人達が、今の戦争をやっているっていうね。アメリカが分裂しようがボロボロになろうが、どうでもいいという、そういう意識だということ。ということは、日本なんて、どうでもいいんですよ。

ぺんぺん草が生える町になっても、所謂、草刈り場として使えればいいというのは、私が、一番、心配しているのは、中国とアメリカが一緒になって日本を収奪するんじゃないかっていう意識が凄くあって、その辺がね、裏切られるんじゃないかと思っているんですけどね。はい。皆さんの意見を聞いてみましょう。モーガンさん、どうですか」

モーガン「先程、用田閣下がおっしゃったことは全部、同感ですけれども一番、凄と思ったのは、アメリカから独立して世界が変わるっていう風におっしゃって、私は正にその通りだと思いますし、非常に傲慢的に聞こえるかと思うんですが、何故、モーガンが図書館から出て、こうやって世界に出てガンガン言っているかって言う」と

水島「(笑)」

モーガン「日本の独立とアメリカの独立がセットだと思っているので、テコを入れるのはここだと思って、そのワシントン落とす能力を持っているのはこの日本だと思うし、日米同盟は日本を封じ込めていると思うし、でも、逆に、その分だけで逆に使えれば、ワシントンが崩壊する。日米同盟が重要だからこそ日米同盟を使って、あのワシントンを裏切ってワシントンが崩れるかもしれないと思って、日本が独立すればアメリカは崩れるかもしれない。

そのアメリカというのはワシントンですよ。ワシントン。私の国を乗っ取っているグローバルリストの連中は、もしかしたら、この日本から終わりを迎えるかもしれないと思って、今、閣下がおっしゃった通りだと、本当に可能性が大だと思うんですよ。この日本の中から正に、大東亜戦争に勝つと思うんですよ。頑張れば最終的に日本が勝つと、私は確信しております」

水島「うん」

モーガン「アメリカが崩壊すれば、私は図書館に帰りますよ。もう、いいですよ。あのう…」

水島「(笑)」

モーガン「楽しんでいますが、そもそも図書館の人間で、でも、そのワシントンが、私の目の前で燃え上がっている映像をテレビで観て、本当に安心して良かったと思って図書館に帰ります」

水島「(笑) まあね、そうならなければいいんですけど。今、皆さんにも意見を聞いてみたいと思うんですけど、宇山さん」

宇山「はい」

水島「今、こういう分析をして貰ったんですけど、どうですか」

宇山「はい。今、用田さんのおっしゃられたことで私が非常に強く印象を受けたのは、日本がアメリカの指揮下に入るのではないかという懸念を表明をされました」

水島「はい」

宇山「私は、このことが最早、現実に進んでいるのではないかなと懸念するんですね。具体的には7月28日に東京で日米の2プラス2が行われましたね。ここで日米両国の外交防衛の閣僚協議が行われまして、在日米軍の再構成、そして両国で作業部会を設置して、協議をするというようなことが決められた訳です。水島社長、お手元の資料の3を出して戴けますでしょうか」

水島「これですね。はい、ちょっと待って下さい。これは3だな。はい。じゃあ、どうぞ」

宇山「はい。この資料にもありますように、この2プラス2でインド太平洋軍司令官の指揮下の統合軍司令部というものが新設をされるということになっております」

水島「はい」

宇山「自衛隊の方にも統合作戦司令部という新しい組織が創設される訳です。これがお互いのカウンターパートになるとして、両国で作業部会を設置して緊密に連携をしていく、協議をしていくということで、2プラス2は、この合意をした訳です。だけど、私は実態としては統合軍司令部、アメリカの司令部の中に日本の自衛隊の統合作戦司令部が指揮下に入れられるのではないかと懸念する訳です」

水島「そうですね」

宇山「この2プラス2では、ブリンケン国務長官がこうっております。これ程に日米同盟が強固の時は無かったという風に言われましたけれども、その上で、この2プラス2の合意というものが岸田総理大臣が4月にアメリカに訪問した際、両首脳が交わした約束の履行の進捗を認識したものであるという風にブリンケン長官は言った訳です。

では、この4月に岸田訪米の時にバイデン大統領と何が合意されたのかという点について、ちょっと、もう一度、おさらいをしておきたいと思うんですけども、お手元の資料の4番を提示して戴けますでしょうか。これが4月に合意をした『未来の為のグローバ

ル・パートナー』と呼ばれる合意文書ですけれども、原文は英語で書かれたんですけども、そこで特に重要なところに赤字で線を引っ張っておきましたけれども、『作戦及び能力のシームレスな統合を可能にする為、二国間で、それぞれの指揮・統制の枠組みを更新する』と、かなり、踏み込んだことが書かれてある訳です。続けて資料の5を提示戴けますか」。

水島「はい。どうぞ」

宇山「まあ、ここでは、はっきりと、より効果的な日米同盟の指揮・統制ということが言われている訳です。これまでは二国間の連携強化というような表現っていうのはありましたけれども、今回、指揮統制の枠組みの更新という明確な表現が盛り込まれた訳ですね。指揮権ということに明確に触れて、ここまで踏み込んだということは、私は無かったのではないかなというように思います」

水島「うん」

宇山「指揮系統が二つあって、軍隊の統率っていうのは執れるはずがないというふうに思うんですけども、最終的にアメリカか日本かどちらかが指揮権を持つということにならざるを得ないんですね」

水島「うん」

宇山「そうすると、日本が指揮権を放棄するという恐れが出て来るんだろうというふうに思います」

水島「そうですね」

宇山「この本日のタイトルにもあります『アメリカ一極支配からの脱却』というテーマですけど、日本はアメリカ支配に自ら積極的に組み込まれに行っているのではないかとこの懸念がですねえ、まあ、私には拭えないんですね。以上です」

水島「いや、全く、そこが一番、これを見て、やっぱり宇山さんの言う通りで、アメリカが共同で二人で、いざとなったら話し合いながらやっぺいこうなんていう話じゃないことは、当たり前なことですね。今、ご指摘通りだと思うんですけども…」

用田「水島さん、水島さん」

水島「はい、どうぞ」

用田「ちょっと付け加えさせて戴きたいです」

水島「はい」

用田「今、宇山さんがおっしゃられた通りです」

水島「はい」

用田「私が一度、指揮権のやつをご説明した時に、一番肝になるのは、自衛隊の統合司令官と、それから、多分、在日米軍司令官が大將になって横並びになるんだと思うんですね」

水島「はい」

用田「これは、所謂、サイド・バイ・サイドの形、そういう形になります」

水島「はい」

用田「でも、その下に統合調整組織っていうやつが出来るんですよ」

水島「はい」

用田「統合調整組織というものが、実は、私は横田に出来るんじゃないかなと思って心配しているんですけども、まあ、場所は別において、ここで調整をして、主要な作戦の、例えば、中国艦隊を撃滅する時期だとか中国本土に対する攻撃だとか、そういう場面に於けるケーススタディをするはずですよ」

水島「うん」

用田「そうすると、その時に誰が指揮を執ったらいいと、こうなった時に、基本的に指揮権密約というのが、ずっと前からあるように、アメリカからゴリ押し、これは当然、アメリカだろうと」

水島「はい」

用田「自衛隊からもアメリカがやった方がいいよねという人達が居る訳ですよ」

水島「うん」

用田「それは何故かと言うと、申し訳ありませんけども、もう海空の装備は全部、アメリカですよ」

水島「うん」

用田「今、陸上自衛隊の装備も対艦ミサイルだけは一応、生き延びて国産ですけども、もう殆どの物、まあ、戦車だけでそうだけでも、装甲車とかそういうものですら、外国の物を買おうとしている訳です、NATO仕様のやつを。」

だから装備と情報と指揮・統制と、この3つを握ろうとしている訳ですよ。それは、もう、別の見方からすると、韓国に於いては在韓米軍司令官、これはアメリカ軍、アメリカ人ですよ。ここでも横並びと言いながらも、在韓米軍司令官が居て在日米軍司令官が居る。アメリカン、アメリカン。NATO、アメリカン」

水島「うん」

用田「だからNATOが広がって、全体のグローバリズムの中の軍事部門を担当して統括をするということになると、全部、アメリカが指揮コントロールする」

水島「うん」

用田「そしてソウルも必然的にアメリカのものになると。今回、ウクライナの戦争で、ヨーロッパの国々が全てアメリカ装備に強制的に切り替えさせられているのと同じことが今、起きている訳ですよ。だから、先程、宇山さんがおっしゃった通り、日本は大きく呑み込まれている。これは、先程、申し上げたように本当にエマニュエル大使の大変な功績です」

水島「いやあ、やりましたね、本当に、さすが総督っていうかねえ、ちょっと腹立ちますけど、その通りです。でも、それを呑み込み、認めちゃったのが岸田政権ですからね。はい、有難うございます。じゃあ、その感想を聞いてみたいと思いますけど、そちらから折本さんは、どうですか」

折本「そうですね。本当に絶望的な状況だなあという風に思いますね。それこそ岸田訪米、あと女性の外相は誰でしたっけ。上川さんでしたっけ。はい。上川さんがアミテージと何か会って話し合ってきたと。今、指揮権の話もそうですし、結局、自衛隊の方でも統合司令部をつけて、アメリカに従属させると。だから完全に、まあ、言うなら、米軍の傭兵の様なものになってしまう」

水島「うん、そうなりますね、はい」

折本「結局、今の日米同盟っていうのも、残念ながら、やはり侵略の同盟になってしまっているという意味に於いては、日本が結局、侵略の先兵として、まあ、ある意味、世界を敵に回すと、孤立化していくということに、この道義的な地位も、どんどん失脚させていくということに繋がると思いますし、あとは、やはりライセンス生産でパトリオット・ミサイルとかを、どんどん造って、それを、まあ、要はアメリカに輸出していくと。

結局、それはウクライナとか、これから起こるそういう戦争で使われて行くということになると、結局、その日本がアメリカや、或いはグローバリストの、ある意味、武器庫にされていくという状況なので、非常に絶望的な状況になっていくなあという風に思います。

まあ、日米合同委員会で月2回、開かれているそうですけども、密約の製造庫だという風に、製造マシンだという風に言われている訳で、実際、表面的な表向きのこういう外交交渉の裏で、どのような米軍と日本政府の間での密約が交わされているのかっていうのは、本当に分からない訳ですし、それこそ、先程、話に出たような、この指揮権密約みたいなものが、もう既に結ばれている可能性も私は高いんじゃないかなあという風に思います」

水島「うん。ありますねえ」

折本「ですから、やはり、そのアメリカも、先程の用田先生のお話ですと、そういう国家を超えた勢力に動かされていると。ある意味で引き摺られているという話もありましたけども、ただ、それを一言で、やはり、こういうグローバリストとかグローバリズムという言葉で表すのであるならば、そのグローバリズムとの戦いを進める上に於いては、やはり日本が現実的には、アメリカから独立をしていくということが何よりも大事であって、今の従属的な日米関係を対等化していく。少なくとも、例えば、そういう横田基地も含めて、そういう撤退をさせていくと。

日米合同委員会も、まあ、そういう廃止をしていくと。地位協定も是正をしていくと。日米同盟を対等化していくことが何よりも大事な事なのかなあと、まあ、対米自立ですね。それが大事だという風に思います」

水島「その通りですけどね。だから本当に、よくモーガンさんが言う拝米保守というかね、この問題が、やっぱり一番、大きい、つまり靖國神社を20年、見ていますとね、人がどんどん増えて来たんですよ。参拝する人が。大変、結構な話だというようなことですけども、結局、アメリカと仲良くやりながら、段々、軍事力も自主防衛みたいなところを

目指すみたいな形で今の国基研はそうですけどね、そういうやり方で、だから、みんな、安心して俺は保守だぁなんて言っていたんですよ。

ところが今言った様に、モーガンさんが指摘している様に、或いは、折本さんも私も言っている様に、本当に血と汗と涙が必要なぐらい命懸けでやらないと、懨っかのことじゃ、これ、全然、変わらない。ところが、そののところで、所謂、拝米保守というのかな、産経新聞を始めとする、さっき言ったイスラエル擁護をしたような人達、今回の。こういう人達は全く口先だけの反米だとかね、アメリカ反対みたいなことだけで、具体的になつたら本当にビビっちゃって、すくんじゃって、今、何も出来ない状態。

だから、折本さんが言った様に、もう絶望的な状況だと。諦めませんけどね。本当に、そのぐらい酷い状態だと。このまま行ったら本当に、もっと言えば、中国と結託してね、日本を草刈り場にしていってというようなことも凄くあると思いますよ。中国とアメリカの、アメリカと言うより、むしろ、そういう支配者達は日本と中国をぶつけてね。お互いに弱らせるとか何かしてコントロールさせるようなことまでやり兼ねない。だから反中とか言っているから安心していちゃいけないっていうことを本当に、我々は見なきゃいけない」

モーガン「言っておきますが、拝米保守は、例えば中国が日本を侵略して、あの拝米保守は一晩中で拝中保守になりますよ」

水島「そうです」

モーガン「そう。みんな、臆病ですから」

水島「そうですね」

モーガン「もう、それは保守ビジネスですから、ここまで日本国民を誤魔化して騙し切ったあの連中は、日本国民を一回も考えたことがないと思いますよ。ただただ、自分の懐にお金を入れたって、このビジネス保守、正論とかに未だに寄稿している人、それは詐欺師と思うんですよ」

一同「(失笑)」

モーガン「言い切ります、詐欺師です。未だに国基研と関わっている人間は、私がアメリカと戦ってきたと言う人が居るんです。それは詐欺師ですと。その人々が明日、拝中保守なんですよ。明日になって、もう北朝鮮の拝朝保守になるとかと…」

一同「(笑)」

モーガン「私は国民を守っていますとか、その連中、その拝中保守が靖國神社を参拝しますよ。War Guilt Information Programは駄目だったとか言うんですよ。あの正論を開けて見て下さい。歴史のことを取り挙げていますよ。それは誤魔化しですよ。それは詐欺師ですと。本当に歴史のことを考えていなくて、あの英霊は何をされたかと、一切、考えていなくて、一つだけ、活米と言っている拝米保守が居るんですよ。目の前に現れて、私が、その方を批判したんですけれども、活米って言ったのは元自衛隊の方ですよ。元自衛隊の將軍だった人ですよ」

水島「うん」

モーガン「活米と言って、英霊の前で活米やっていると言えるんですかと言ったんですよ。言えますか」

水島「うん」

モーガン「日本国として、この国は未だ占領されていますと。本気で英霊達に報告できるかと。もう拝米保守は、みんな、詐欺師と」

水島「うん」

モーガン「一刻も早く目覚めて気づいて戴きたいと思います」

水島「そうですね。だから戦後79年、80年にもうじきなりますけど、これは完全に自己否定を要求している訳ですよ、これまでのね。自分達、保守って自称していたけど、これが全くインチキだったということ」

モーガン「そう詐欺です」

水島「まあ、だからね（笑）、本当に、そういうことを自己否定しなきゃいけない」

モーガン「はい」

水島「でも、これは勇気を持ってやらないと、日本は救えないってことですよね。はい。そういう意味で、皆さんの意見も聞いてみたいと思います。施さんは、どうですか」

施「そうですね。先程、用田先生のおっしゃった中で、私が一番、そうだなあと思ったのは、今は、アメリカとかイギリスとかっていう国民国家単位で、グローバリストは考えていないと言いますか、そういう正に今日のテーマ、アメリカ一極支配脱却ですけれども、より正確には、やはりワシントン・グローバリスト一極支配脱却というか、そういう風に位置付けた方がいいと思うんですね。この時に、私は、今の一番の支配層、力を持っている層が意図的に、そういう風に進めているかどうかと言うか、意図的、戦略的に進めているかどうかというよりは、ちょっと、判断する為のきちんとした材料を持っていないんですけれども、ただ、現実的に、そうなりつつあるという風に思うんですね。

例えば、どうですかねえ、ちょっと話がずれるかもしれませんが、所謂、ポリティカル・コレクトネスとか、そのアイデンティティの政治っていうのを見てみると、あれは、やはり、今迄の国民国家単位の政治っていうのをやろうとは全然していないですね。もうポリコレ・アイデンティティの政治っていうのは、正に国民を連帯させるってことは全く考えていないというか、もう細分化されたアイデンティティですね。

マイノリティのアイデンティティ、エスニックなものでもジェンダーのものでもそうなんですけれども、本当に細分化してって人々を団結させないようにしようっていうところがあると思うんですね。やはり団結すると、グローバリストなり、その支配層に連携して、連帯して対抗して来るではないかと。だから、もう、そういうものを全部、バラバラにした方が自分達の権力は使い易いということだと思うんですね。

そういう中間団体みたいな家庭も地域社会も、そういう何て言いますか、文化集団みたいなものも、ひいては、このネーションとか国民国家とかっていうものですね。こういうものを全部、バラバラにしてしまった方がいいのだと。そういう発想でポリコレ的なものアイデンティティの政治的なものっていうのはやっていると思うんですね。

実際、連携させるようなところというのは、全然、議論されていないっていうか、ですから、いや、これ、ポリコレをやっている人は、だったら、じゃあ、どういう風にこれからのアメリカを創っていくのだっていう話を殆どしないと思うんですね。ですので、そういうところで、今、ともかくバラバラに個人を細分化していけばいいのだと。

その中で、自分達が一番、力を奮い易い環境をつくれればいいのだという風にやっているように、やはり見えるんですね。これは2018年に出たアメリカの本ですが、スロボディアンという経済史の学者ですけれども、グローバリストっていう本を書いているんですね」

水島「うん」

施「翻訳されてないですけど『Globalist』で、サブタイトルが『帝国の終焉と新自由主義の誕生』っていうことで、これは、どういう本かと言いますと、所謂、新自由主義者っていうのは、正にそういう風に国民国家を敵として見ていると。何故かって言ったら、国民国家っていうのは、金持ちに対して国民国家っていうものを創って、そして金持ちから財産を奪おうとするんだと。この新自由主義の学者っていうのは元々の、例えばミーゼスとか何かそういうのは、これは若干、陰謀論めくところもあるんですけども、そういうウィーン生まれの学者っていうのは、一種のハプスブルク帝国みたいな帝国体制に郷愁を持っているんだって言うんですね。

そういうところから、つまり自分達は貴族みたいな特権階級だったのが段々と国民国家っていうものが出来て来て、正当性をもって自分達、金持ちとか特権階級の財産とか権力っていうのを奪って行ったんだと。だから国民国家が憎いのだっていう感じで、言ってみれば、人々が団結して何か政治みたいなことをやろうっていう自体を嫌っているっていうような話をしているんですね。

私は、このスロボディアの言っていることっていうのは、本当に経済史的に、学術的に正しいのかっていうのは、ちょっと判断できるかどうか分からないんですけども、ただ、実際に、そういう風に国民国家的なもの自体をグローバリストは敵として見ていると。これをなるべくだったらバラバラにした方が自分達の権力が奮い易いと。何か、そういう風に思っているというのは、一面の心理だと思うんですね」

水島「そうですね」

施「ですから、その国民国家が無くなった時に普通の一般の人間が、どの国の人でも幸せに暮らせるかという、そして安定的に、尚且つ、充実感を持って暮らせるかって言ったら恐らく大多数の人は暮らせないと思うんですね。ですから、そういう意味で、やはり国民国家っていうものは大切、まあ、国っていうものは大切ですし、それを、やはり維持した方が日本国民を含め大多数の人は安定的、且つ、幸せに、そして充実感を持って、その過去との繋がりを感じながら、そして未来への展望を持ちながら暮らしていけると思うんですね。

ですから何かそういうところで、やはり多数の国々からなる多数の国民国家からなる世界っていうのを、いかに創っていくか。これは、私が大東亜戦争の理念の一番、良質な部分に関わって来るんだと思うんですね。ですから、そういうところで、正にグローバリズムじゃない世界秩序っていうものを考えていく必要があるのではないかと。それを日本が…」

水島「八紘爲宇に近い感じですか…」

施「そうですね。うん、まあ、そうだと思いますね。それを日本人が主導して発案していくという気概を持っていくべきだという風に思いますね。はい」

水島「はい。有難うございます。大高さん、どうですか」

大高「用田先生がおっしゃった通り、グローバリストの創る世界が、もう真っ黒けっけに書いてある訳じゃないですか（笑）。グローバリストって人数で言えば極少数な訳ですよ。ただ、彼らはメディア、司法、お金、軍事、様々なものを押さえている。けれども逆に彼らの弱点っていうのがあって、それは普通の我々に彼らが仕掛けている構造を暴かれて知られてしまうことですよ。うん。これに気づいたら、例えば、モーガンさんのようにワシントンには、乗っ取られていると感じているアメリカ人も居るはずなんですよ」

モーガン「はい」

大高「どうしてイスラエルに、ここまで加担しなきゃいけないのかと思っている方も居る訳ですよ」

モーガン「はい」

大高「色々な気づきが今、世界の中で逆に広がって来ているのも事実で、彼らがやり過ぎた部分もあって、だからその構造を暴く、それから、その反グローバリストとの連携っていうのは非常に大事だと思います。最後は、この Japan' s Holocaust は、ある意味でいいテキストなんです。反日グローバリストの構造が全部、解明できる」

水島「何をしたいか、言いたいのかね」

大高「そう。例えば、引用が最多になっているハリス&ハリスって、まあ、スージー・ハリスって、ご夫妻の引用が百何回、この Japan' s Holocaust に引用されていて、知らない人、殆ど、私も知らなかったハリス、スージー・ハリスって、どういう方かって言うと、イギリス在住の芸術関係に精通している方でね、例えば移民博物館等にも寄稿しているんですけども。この移民博物館をやっているバーバラ・ロッシュさんというユダヤ系の方が、こう書いているんですね。

『世界中で移民の現実を自国の歴史の一部として祝う国が増えている一方、イギリスでは未だにそうではない。(略)イギリスの移民の歴史を我が国の歴史の中心に据えるべきだと、熱心に信じている』と。つまりイギリスの歴史を変え、移民の歴史を中心にしろと。こういう発想ですよ。解り易いですよ。岸田さんも、これから5年間で82万人の労働者を入れると。日本を移民大国にしよう、全部、これ…」

水島「400万人になるね、結局ね」

大高「ね。この流れをつくろうとしている。一般の日本人は、もう、いい加減にしてくれと思っている訳ですよ。これを放っておいたら日本も10年後…」

水島「なりますね」

大高「移民の外国人の歴史を日本の歴史の中心に据えるべきだと、また、阿呆なプロパガンダを始める人が居ますよ。だから、こういうのが、もう全部、構造が見えて来て、それ

が世界の人を幸せにしない。日本人の腸（はらわた）は煮えくり返るといふ政策に気づかされているのだから、私は、もうアメリカとかも反グローバリストと連携しながら世界中、ロシアにも居るかもしれないし、もう、やっていくしかないかなあと思うんですよ。

ちょっと、自分の宣伝になって申し訳ないんですけど『ジャパニーズ・ホロコースト』を解体しました。23日に出版です。これ、第一歩です。凄く根が深く、とても私の一冊では終わらないぐらいの問題を抱えている本だと思うので、どんどんと日本の方は、あとに続いて、これを分析して、みんなで共有しながらやっていけば、結局、その太平洋戦争史観ではこの戦は乗り切れないので、しっかりと大東亜戦争を理解して背骨を入れてから戦えば、何とか乗り切れるような気がするんですけど。いかがですか」

モーガン「はい、頑張りましょう」

水島「まあ、そういう意味で、今日はこういう大東亜戦争の話ですけど、さっき国民国家の話が出ましたけど、グローバリズム対反グローバリズム、或いは、ナショナリズムとかね、こういう言い方があったんですけど、ハンチントンが言ったように、我々の文明というのは8大文明の中でも本当に独自の文明である。

私は日本って、どういう国であるかって言うと、所謂、ジョン・ロックやそういう国民国家として今、生きているはずになっているけれども、現実には自然国家っていうか、何か理念とかそういうもので、或いは社会契約論的な意識で創られた国じゃないっていうね、ここが、やっぱり物凄く自分達でしっかり自覚してね、実は凄く国だと。

そういう西歐的な理念やそういうもので創られた国ではない。それこそ八紘一宇でもいいんですけども、家族のような国を創りたいというね、こういった神武天皇以来のこと、それから聖徳太子の、それこそ憲法とかね、そういったものを含めて、実は我々独自の文明を持っているんだと。だから、それを守りましょうよというようなことを、しっかりと我々自体が、自覚しないと、何を守りたい、何を取り戻したい、こういうのが自覚されないと全部、グローバリズムにやられてしまう。

今だけ金だけ自分だけっていう、この流れっていうのは本当にハッキリ言うと、我々の国はそうなっているんですよ。政治家が、みんな、そうですから。だけど私達の中で一番、いつも私は言いますが、大雑把に言うと、時間を世界観の中に、自然観の中に取り入れている文明っていうのは無いので、我々は文化なんですね。

文明というのは耐えず進歩していくとか発達するとかありますけど、時間を取り込んで過去と未来と今が本当は一体化しているのが、実は江戸時代までの日本の文明、文化だった。この間、討論をやった時、土木関係の専門家がいきました。実は日本の治水、土手とか堤防は、95%は江戸時代に造られている。明治以降は、みんな、修理しているだけっていうような、こういう形、あの時代ですら未来の子孫とか自分達の自然というのが未来に繋がる。死んだあと、みんなが役に立つことが出来る、こういう意識をずっと持っていたっていう我々の自然観とか世界観は、やっぱり、もっともっと大事にしなきゃいけないし、これは、もっと言えば、世界標準になると思っているんですね。

それから古いモンゴロイドっていうのは、南米のインディオとかも含めてネイティブ・アメリカンも含めて、実は、そういう時間感覚を持った文化だったということも、もう一回、見出さなきゃいけない。私達の日本っていうのは、西洋の文明論とは違うものを持っている。みんなと同じになろうというよりも大事な良いものは、みんなに分かち合う、そ

ういうつもりであるぐらいの方が、何とか絶望的な状況で乗り越えられないっていうかね、頑張りますよ。

先程、フィラーというか宣伝の中に出ましたけど、本当に『ますらおの悲しき命、積み重ね、積み重ね、守る大和島根を』っていう、つまり本当に、ますらおの命を沢山、積み重ねないと、特攻隊とか大東亜戦争がそうだったように、我々も、また同じように、その覚悟を持ってやらないと、とてもじゃないけど、日本は、もう一回、再生できない。でも、それがあるから、我々は出来るじゃないかと。

人間がやったことですから、日本人が先祖がやって来たことを、我々もやることは出来るっていうね、そういう希望を持ちたいと思いますけど。大東亜戦争の討論は、また来年も行いますが、違う形でねえ、80年にして日本の自立、第一歩、外国の軍隊が80年も居座った、日本の歴史上、かつて無かった、この80年を乗り越える道を、これから踏み出して行けばいいと思います。何か言い足りなかった方が居たら、お聞きしますけど、いいですか」

折本「(挙手)」

水島「ああ、じゃあ、どうぞ、はい」

折本「あ、すみません、せっかく作ってききましたので宜しいでしょうか」

水島「はい」

折本「今、正に欧米主導の世界秩序に対抗する、やはり、新しい世界秩序のモデルを日本が提示すべきであるという風に思っております」

水島「はい」

折本「それで先程の話にも出ましたけども、大東亜戦争に際して、やはり日本が自存自衛の戦いであると同時にアジア解放の戦いであったというところで、それを表している、一つの重要な国際会議が戦時中の1943年に東京で開かれまして」

水島「大東亜会議ですか」

折本「大東亜会議ですね」

水島「はい」

折本「それでアジアの独立の指導者が一堂に会して、我が国、日本の東条首相が議長になって国際会議をやったというところであります、その中で、例えば有名な方ですと、インドのチャンドラ・ボースがインド仮政府の首班として左端に座っておりますけども参加をしておりました。私はインドに3年間、住んでいたことがありますので、インドの中でも、やはりチャンドラ・ボースというのは特別な存在、独立の英雄であります、カンジーやジャワハルラール・ネルーと並ぶ独立の英雄であるということですけども、先日、我が国が開戦をしてマレー半島に上陸して、山下奉文大将が25軍を率いてマレー半島に上陸して、それで、シンガポールまで攻め下っていく訳ですけども、それでシンガポールが陥落した時に、そこに居たインド兵を集めて、そのインド国民軍というインド・ナショナル・アーミーという、略してINAですね。

軍隊を組織をして、それで、I N Aの司令官が最初は、先程、話に出て来た中村屋のボースだった訳ですね。ビハリ・ボースだったんですけども、その司令官を、このドイツからUボートに乗って、日本に亡命して来たチャンドラ・ボースが、この指揮官を引き継いで、就任をします。このチャンドラ・ボース率いるI N Aとインド国民軍と我が国が、我が軍が、インパール作戦に於いて、このビルマ国境を越えて、インドに共に進軍をしたということが、やはり、インドにとっても非常に大きな歴史的な出来事になっていますし、やはり、日印の非常に重要な歴史的な財産になっているということでもあります。

このI N Aを組織したのがチャンドラ・ボースですけども、この藤原岩市という南方軍の参謀でありまして、この方は今もインドでは、独立の父はチャンドラ・ボースですけども、インド独立の母という風に言われて、私はインドに居た時にも日本が造ったメトロがデリーにあるんですけども、そのメトロの中に、このI N Aという駅が今も残っております」

水島「ほお～」

折本「インド・ナショナル・アーミーですね。やはり大東亜戦争がアジア解放の為に残してくれた遺産というものが、これから我々がアジアの国、それこそグローバルサウスが台頭してきて、そういう欧米だとか、或いはグローバリスト主導の世界秩序に対抗する上で一つの大きな共通前提になるのではないかなと、遺産にベースになるのではないかな、この歴史的な絆という風に思っております。

この大東亜会議ですけども、正に世界史上初の有色人種の国家指導者による国際会議でありまして、500年以上に及んだ白人支配の世界秩序を打破してアジア民族による共存共栄の道義秩序を目指したということでありまして、その大東亜共同宣言に於いても非常に重要な理念が謳われております。まあ、紙で申し訳ないんですけども、大東亜各国は、共同して東亜の安定を確保し、道義に基づく共存共栄の秩序を建設するとか、或いは、大東亜各国は、相互に自主独立を尊重し、互助敦睦の実を挙げ大東亜の親和を確立する。正にアジア民族が、この自主独立して、そういう一つの普遍主義ではなくて、国家、民族が自主独立して平等に連帯をして共存共栄をしていくという、こういう新しい理念を打ち出したということの意義は非常に大きいという風に思います。

ですから、こういった遺産を活用して、活用すると言いますか、それに立ち返って立脚して、我が国も道義国家としての理想を世界に対して示していくということが非常に重要だという風に思っております」

水島「はい。有難うございます。チャンドラ・ボースのご遺骨は杉並の…」

折本「ああ、蓮光寺ですね、はい」

水島「蓮光寺さんにありまして、前に安倍さんの要請でインド訪問団をやった時、ご遺骨を半分、お持ちしてインドに納めようと思ったんだけど、当時、国民会議派の人達で、ちょっと遠慮してくれと言われて、故郷って言うかね、インドにお帰り戴きたいと思ったんだけど、そういうのを出来なかった思い出があります。行け、行け、デリーへって、あの有名なインド国民軍の歌を、もう、お亡くなりになりましたけど名越二荒之助先生っていう方が一緒に、インドを訪問した時、地方議員も50人ぐらい一緒に行ったので総勢200人ぐらいのインド訪問団をやったんですけど、その時、本当に、行け、行け、デリーっていう歌を名越先生がチャンドラ・ボース像の前で声を詰まらせながら歌っていたって

う思い出があります。

それと、もう一つ、今、良い指摘して戴いたのはインパール作戦っていうのは、本当に最低最悪の牟田口中将が酷い作戦をやったって言いますけども、それは大変、本当に地獄の様な補給も無くて、沢山の方がお亡くなりになったんだけど、インドにとって、今、おっしゃったように、インパール作戦は独立の為に物凄く役に立った戦いだったというのもあった」

折本「はい」

水島「名誉の為に、今、言ってくれたのは大変、有難いなと思いました。そういう意味では、先程、休憩の時、大高さんと話したのは、欧米の植民地支配と、我々がアジアとの関わりになったのは今、大東亜会議にあるように兄貴みたいな感じですよ。ちょっと金持ちで力のある兄貴で、弟達や妹達を面倒見る。満州国っていうのも南京の真実の第二作で、中国の問題で満州国を採り上げたんですけどね。

あの満州国は役人の8割が日本人でした。五族協和と言っても2割が現地の人。ただ、実際は、そうでなければやっていけなかったと。官僚とかそういうシステムとか、そういうのは日本でしか出来なかった。それと、もう一つ、これも名誉の為に言っておくと、満州国のインフラ整備は日本国内よりも進んでいた。それから100万人以上の周りの中国人というか、満州国が成立してから、そういう人達が流入して来た。嫌な国だったら絶対、入らないです。ウクライナは沢山の人、700万人が出ていったと言いますが、満州国は入って来たっていうこともある。色々な問題は、皆さん、言われるかも分からないけども、そういう現実っていうのを、沢山のみんなが知ってね、満州国自体が、朝鮮半島もそうだったんだけど、日本の国内を犠牲にしても、そういうところで投資と言うか財政出動してやっていたっていうねえ。

日本人の人が善いと言うか何と言うか、こういうのも、ちょっと見ておかなきゃいけない。だから中国に侵略して何だかとかって、そういう風に中国人はそう捉えるかも分らんけども、現実にはそうじゃなかったっていうのもね。何かありますか」

モーガン「最後に一点、宜しいですか」

水島「はい、どうぞ」

モーガン「今、インパール作戦が出たので、チャンドラ・ボースは、私からすればヒーローですし、昔、どういう状況だったかと、もう一度、確認した方がいいと思いますよ。このJapan's Holocaustの中にも、欧米がどれだけアジアとアフリカとかを搾取していたかという指摘は一回も無いと思います。チャーチルがやっていることは当たり前かのような書き方もあるし、そのG7、グループ7、長崎の式典に行かないとかっていうG7はグループ・セブンっていうんですけども、ジェノサイド・セブンだと思うんですよ。あの連中は非白人をジェノサイドした上で、自分の国々の帝国とかを出来た訳ですよ。Genocide Seven。

それに対して戦ったのはチャンドラ・ボースとか日本軍とか、それは非常に誇るべき事だと思いますし、これからも正にそれが必要だと思います」

水島「はい、そうですね」

モーガン「用田先生がおっしゃったこと、3正面で戦いが出来ると傲慢に思っているワシントンだけれども、その妄想を、どうですか、いやいや3正面、4正面、出来るんじゃないですか。お前達は凄いと。あの連中の傲慢を武器化して武装化して、いや、もっともっと戦争するように台湾有事は日本の有事だと言って、そこで戦争が勃発すれば、あ、ごめんなさい、行かないと、裏切って、それで米軍が沢山、消えるじゃないですか。そのような腹黒い事をすれば、この日本はやっと独立できると考えています。要はアメリカの傲慢を煽りましょう。

誉めたてて、貴方達は凄いですよ、さすが民主主義の正義の国ですねと言って、もっと戦争するように煽って、その米軍はベトナムで見た通り、タリバンにも負けたんですよ」

水島「うん」

モーガン「負ける。もう戦いましょう。以上です」

水島「そうですね」

モーガン「英霊のように戦いましょう」

水島「はい」

モーガン「優れている歴史があります」

水島「はい。有難うございます。今、おっしゃったように、とにかく日本は戦わないと取り戻せません。お願いするとかお話し合いで、そういうものを取り戻せる世界ではないっていうのは明らかです。それと、もう一つは、もっと陰險な形で恐らく中東も、もしか、日本も、公衆衛生の部門で、所謂、こういう形で滅ぼすとかね」

モーガン「そうです」

水島「戦場にしてしまう。こういうことも、彼らは考えている。単なる戦火を交えるだけの戦争ではなくて、ワクチンの問題とか色々な問題で、やろうとしている公衆衛生の部門も、先程、用田さんがチラッとおっしゃっていましたが、こういう形で我々の国をコントロールしようとする。草刈り場にする、徹底的な収奪の場所にする。はっきり言えば、もう我々の国は植民地です。植民地政府の調子のいい首相が今、中央アジアへ行こうとしたりね、何かしようとしているっていうねえ、一刻も早く本当に我々の力で変える、日本の国民の力をもう一回、示さなきゃいけないという気は致しました。いいですね、じゃあ。他に無ければ、今日は以上であります。有難うございました」

一同「(礼)」

***** お わ り *****